
愉快な三人組

(' ヲ `) ウボァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愉快な三人組

【Nコード】

N1300G

【作者名】

(, ∇,) ウボア

【あらすじ】

いつも行動をともにし、「愉快な三人組」と呼ばれている三人の小学生の生活をえがいた物語です。

第1話：愉快な三人組

二〇〇七年四月のある朝。ここは、西京県八王山市にある今治小学校。この少年は、今日も朝早くに登校し、校門の前でつつたっている。

「ったくー、校門も早くあけろよな。朝は寒いんだよ。」

こう叫んだ少年の名は、高橋信二。やんちゃで、勉強嫌いで、チビである。

信二という名前から、他の生徒からは「シンベエ」と呼ばれている。

しばらくすると、校門があいた。

「やつとかー。もう、管理職員のやつ、ケチなんだから。おれが来たときから、あけてくれたらいいのに。」

シンベエは、靴箱で上ぐつに履き替えた。

もう既に、何人かの生徒が来ている。

シンベエは、むっつりとしながら、五年生の教室がある四階へと向かった。

その頃……

今治小学校から約五〇〇メートルほど離れた場所にあるマンション「八王山ハイツ」。

ここの五〇三号室に、寝坊している少年がいた。

「反吉！おきなさい！」

「うーん、もうちょつと！」

「もう八時よ。」

「わかった！」

このぶくぶくと太っている少年の名は、中田反吉。その外見から、

「ぶーちゃん」と言われている。

「反吉。ごはんできてるわよ。早くたべなさい。」

ぶーちゃんは、もの凄いスピードで食パンにイチゴジャムをつけ、ほおばりはじめた。

「いってきま〜す」

食パンを三枚、野菜スープを二杯、牛乳を三杯、トマトとほうれんそうのココットを三杯食べたぶーちゃんは、あわただしく着替えて出かけた。

その時、同じマンションのエレベーターの中に、やけにひよろりとしためがねをかけている少年がいた。

少年の名前は、堀田一郎という。

友達からは、「ホーリー」なるニツクネームで呼ばれている。

この少年は、かなりのガリ勉で、食事中に問題集をやっているほどだが、学力のほうは、そうよくもない。クラスで中の下くらいだろう。

この三人は、同じ五年一組である。三人は大の仲良しで、何をするにも一緒にいることから、クラスメイトからは「愉快的三人組」と呼ばれている。

だが、たまにいやみで「不愉快的三人組」などと呼ぶ者もいる。

五年一組の担任は、中井哲郎という、ベテランのおじいちゃん先生である。宿題をかなり多くだすので、生徒からは不評だ。

朝の遊び時間終了のチャイムがなった。チャイムがなった三分くらい後に、クラスメイトたちは教室へと戻ってくる。

遊び時間終了のチャイムがなる五分後から十分間、「読書タイム」というものがある。これは、生徒達に読書に親しんでほしいからという理由で一時間目を削ってできたものだが、かんじんの生徒達は

読書などせず、自由帳に絵を描いたり、教室から出てどこかへ行ってしまうたり、べらべらとお喋りをしていたりする。

約十分たち、一時間目の開始を知らせるチャイムがなった。生徒達は急いで自分の席に座り、先生が入ってくるのを待つ。中井先生はどこかおっとりしていて、チャイムがなってから一分ほどたって、ようやく教室にやってくる。

中井先生が教室へ入った五分後、廊下からドスドスという音が聞こえてきた。

「あのく……あの、その、……遅れてすみません。」

「はあ……席につけ。」

ぶーちゃんが、かなり遅刻してやってきた。ぶーちゃんは、遅刻の常習犯なので、中井先生からは諦められている。そのため、ぶーちゃんは説教されずに、席につくことができた。

中井先生は、黒板に「教科書二十六ページをやれ」だの、「プリントをやれ」だの書いた。中井先生は、一つの単元を教える事はほとんどしない。

ぶーちゃんとホーリーは、まじめに先生が書いたことをやっているが、シンベエはやっていない。それどころか、授業中なのに隣の子とお喋りを始めた。隣の子は断るということができない性格の子で、かまわず喋りはじめた。このような手抜き授業では、このようなことがおきるのも仕方ないだろう。

二時間目は、体育。シンベエはスポーツが大好きなので、とても喜んでいるが、ぶーちゃんはスポーツが大の苦手。「いやだ」を連呼する。

ホーリーはスポーツが苦手というわけではないが、あまり好きなほ

うではない。だが、体育が嫌いなことは決して口にはしない。中学校に入ったときの練習のためだ。

最も、内申書などというものを知っている小学五年生など、この少年くらいだろう。

午後四時ごろ、四年生以上の子供達が次々に校門から吐き出されていく。シンベエ、ぶーちゃん、ホーリーは、三人で一緒に帰ることにしている。

「おい、ぶーちゃん、お前体育でヘマしすぎだろ。ボールを二メートルもなげられない奴なんて、お前以外見たことがない。」

「やめろよシンベエくん。スポーツは、どれだけ練習してもうまくならないひとだっているんだ。きみだって、勉強は苦手だろ？」

「あ、う、ま、まあ、そうだけど・・・あれはひどいと思ったからさ。もう少しまともにできないのになって。」

「きみは勉強をまともにできるかい？」

「ホーリーちゃんやめて。ぼくたち大のなかよしでしょ。そんなくだらないことで、くちげんかするのは、やめようよ。」

「ま、そうだね。シンベエくん、もう、それいじょうぶーちゃんをせめないでくれよ。」

「わ、わかったよ・・・」

それにしてもこの三人、仲がいいのか悪いのかわからない。

シンベエはぶーちゃんたちのマンションとは全然違う場所にあるので、ぶーちゃんたちは途中でシンベエとお別れになる。

「ばいばい。」

「また明日ー。」

「おう。」

こんなぐあいのあいさつで、ぶーちゃんたちとシンベエは別れた。

ぶーちゃんとホーリーは同じマンションだが、階は違う。ぶーちゃ

んは五階で、ホーリーは七階だ。

エレベーターに乗り込んだ二人は五階と七階のボタンを押し、じつと待つ。

「ばいばい。」

「ばいばい。」

ホーリー一人を残して、エレベーターのとびらが閉まった。

しかし、エレベーターはなぜか途中でとまった。それも、階と階の間でだ。

ドアが開かなくなって、ホーリーはあせる。

「おい！ぶーちゃん！気づいてー！」

だが、ぶーちゃんは気づいてくれない。

ホーリーは、へなへなとエレベーターの中で座り込んだ。

そして、いつのまにか眠っていた。

「……い……お……お……おい。」

「おい！大丈夫か？」

「ん……んー？」

ホーリーはこの声をきいておきた。

「もう脱出できるからな。安心しろ。」

「ん……あ……そっか……ぼくエレベーターに閉じ込められたんだっけ……」

さきほどまで階と階の間でとまっていたはずのエレベーターは、5階にとまっていて、ドアが開きっぱなしになっていた。

「一郎……よかった。」

「母さん……」

気がつくと、目の前のおじさんだけでなく、ホーリーの母親や、ぶーちゃんまで集まってきていた。

「母さん……今、何時……？」

「五時よ。」

五時・・・ぼくは、一時間近くも閉じ込められていたのか。もしかしたら、窒息していたかも・・・いや、換気扇があるから大丈夫かなどとごちゃごちゃ考えながら、ホーリーは立ち上がった。

「階段で行きましょう。」

ホーリーは、母親に手をつながれながら、階段を少しずつのぼった。ホーリーは自分の家に入り、リビングまで走ると、気持ちよさそうな革のソファにどかっと座った。

第2話：盗まれたゲームソフト

桜の花びらがたくさん落ちている校門を通り、今日もシンベエ、ぶーちゃん、ホーリーは一緒に帰っていく。

途中でぶーちゃんとホーリーに別れをつげたシンベエは、全力疾走で家へ向かう。

今日は、新しいゲームの発売日。貯金箱を割って、ゲーム屋へ買いに行くのだ。

家へついたシンベエは、貯金箱をかなづちで割った。中には、五百円玉が十二枚。ゲームを買うには、十分だ。

シンベエは急いで自転車に乗り、信じられないような猛スピードで、ゲーム屋へと向かった。

ここから、ゲーム屋は遠い。なにしろ、電車を二駅ほど乗って、やっと行けるほどなのだ。だが、電車賃がかかると、ゲームが買えなくなるかもしれない。自転車で行けなくもない距離なので、シンベエは自転車を使ったのだ。

三十分ほどペダルをこいでいると、大きなスーパーのようなゲーム屋が見えてきた。あそこだ。

ゲーム屋の前に自転車をとめ、エスカレーターで三階まであがる。あったあった。これが、今日発売された、「ドラゴンRPG」というゲームだ。

パッケージを持ち、狭い店内なものにもかかわらず全力疾走で一階まで行き、レジの前に置いた。

「これ、ください。」

「五千八百円です。」

電車に乗らなくてよかった。シンベエの最寄駅からゲーム屋の最寄駅まで電車を使うと、電車賃が百五十円かかるのだ。行きは乗れるが帰りは歩いていかなければなくなる。そうすると、家に戻る事が出来るのは夕方ごろになり、家に帰った途端に母ちゃんに怒られていただろう。

そう思いながら、シンベエは五百円玉を十二枚、店員に渡す。

店員は、一瞬呆れたような顔をした気がするが、シンベエは気にせず、パッケージを奪うかのように取り、大急ぎで自転車にまたがると、これまた家へ向かって信じられないスピードで走り出した。

家に帰ったシンベエは、ゲーム機にさっき買ってきたゲームソフトをセットすると、ピコピコやりだした。

この「ドラゴンRPG」というゲームは、主人公の「ゆうしゃ」が、様々なモンスターと呼ばれる敵を倒していき、お金と経験値をゲットする。そうして、「ゆうしゃ」は買い物をするのができたり、レベルアップできたりする。といった内容だ。

だが、難易度は相当高いらしく、シンベエは若干いらついていた。

「ああ。またおおなめくじにやられた。これ、勝てるわけないだろ。」

「シンベエ、夕ごはんよ。」

下の方から母親の声がする。もう夕ごはんの時間か。ゲームをやっている、たつ時間が早いものである。

「ちよつとまってー。いまいくー。」

シンベエは「ゆうしゃ」を「しんぷ」に話しかけさせて、「セーブ」をしたのちゲームの電源を切り、階段をかけおりてダイニングへと向かった。

「今日の夕ごはんは、ステーキよ。今日は父さんの給料日だから、ちよっと奮発しちゃった。」

「おお！ステーキカー！そいつはいいね。」

「はは、ちよっとつらいな。父さん、あんまり給料高くないんだ。」

「あら、それでも五十万ももらったのなら、上出来じゃない。」

「そうか。そうだな。今は金のことを忘れて、思いっきり食べよう！」

「いただきます。」

三人はそういうと、とても大きい、霜が降っているサーロインステーキを、ナイフを使って切ったりもせず、フォークで刺すと、ほおばりはじめた。

「そうだ母ちゃん、おれ今日新しいゲームソフト買ったんだ。」

「よかったわね。今回も、『アールピージー』っていうものを買ったの？」

「そうだぜ。おれ、RPG大好きなんだ。」

「そうなのー。そんなにおこづかいあげてないつもりだけど、案外買えちゃうのね。」

「父さんの少ない給料で、こんなステーキだって、買えちゃったのと、同じだな。」

「父ちゃんの給料、やっぱり少ねえの？じゃあ、ゲームを買ったり、ステーキを食べたりしちゃあ大丈夫じゃないんじゃないの？」

「ふふ。お父さんの給料は、結構いいわよ。とはいっても、普通のサラリーマンと同じくらいだけど。それでも、ステーキくらいなら買っても大丈夫だわ。」

「それに、子供はいっぱい遊ばなきゃいけないんだ。お金のことなんか心配せず、そのゲームをうんと楽しみなさい。」

「うん、わかったよ、父ちゃん。母ちゃん。このステーキ、おいしいぜ。」

「そうだな。ハハハ・・・。」

「そうだ、今日学校で『将来の夢を考えましょう』って授業があったんだぜ。それで、他の奴等の考えた将来の夢が面白いんだ。」

「どんなのがあったの？」

「えっと、おれは『野球選手』っていったんだ。で、ぶーちゃんは、『グルメリポーター』だって。ホーリーは、『弁護士』になりたいらしい。」

「へえ、堀田君は弁護士かあ。そりゃあすごいねえ。グルメリポーターも、楽しそうでいいじゃないか。」

「それで、安治は『開業医』で、大次郎は、『サッカー選手』だった。」

「まあ、安治君は開業医なの。すごいわねえ。」

「開業医って意味、おれは知らないんだけど、どんなの？」

「自分でクリニックをひらくの。ほら、この辺に『安田クリニック』ってあるでしょ。ああいうの。」

「でも、それですごいんなら、パン屋や、ケーキ屋も、すごいんじゃないの。」

「開業医は給料が桁違いなのよ。」

「どれくらい？」

「お父さんの五倍以上。」

「それ、本当にすごいじゃないか。安治って、結構いい夢もってるんだな。おれも開業医になってみようかな。」

「ふふっ、あなたの学力では無理よ。」

「母ちゃん、いくらなんでもそりゃないよ。」

「ごめんなさい。冗談よ。人間、何事だってやりたいことを目指して努力すれば、そのやりたいことは大抵できるもの。」

「ふーん。」

会話がこの辺まで進んだところで、シンベエはステーキをほとんど食べていた。

次の日、学校から帰ってきたシンベエはとんでもないことに気がついた。

「ゲームが・・・、ない、ない、なくなってる！」

シンベエのゲーム機が、全てそっくりそのまま消えているのだ。

母親が捨ててしまったと思ったシンベエは、さっそく母親に問い詰めた。

「母ちゃん！いくらなんでも捨ててしまうなんてひどいぜ！」

「え・・・？なんのこと？」

「母ちゃん、ゲーム捨ててしまったんでしょ！おれ、あのゲーム気にいってたのに。」

「はい？ゲームなんて捨ててないわよ。」

「もういいよ！母ちゃん！そんなにしらばっくれることなのに・・・」

「あ、わかった。あんた泥棒に入られたんでしょ。」

「泥棒・・・？何いってんだよ母ちゃん、この世にゲーム機だけもっていく泥棒なんているもんか。」

「わかんないわよ。よっぽどゲームが好きだけど、お金がなくて買えない人が、もっていったのかも。」

「母ちゃん！泥棒に入られたと思ってるのなら、どうしてそんなに落ち着いているの！」

「え・・・いや、あせっても駄目でしょ。」

「とにかく、警察に電話してよ！」

「警察ねえ・・・もし、泥棒じゃなかったらどうするの？」

「母ちゃんが泥棒っていったんでしょ！電話して！」

「はいはい。わかりました。だけど、そんなに怒らないでちょうだい。こっちまで不機嫌になるわ。」

「ごめん・・・母ちゃん・・・」

シンベエがそう言ったとき、母親は既に電話の受話器をとっていた。

「もしもし・・・ゲーム機が盗まれたみたいなんですけど・・・」

「ゲーム機が？他のものは大丈夫だったんですか？」

「ええ、ゲーム機だけがそっくりそのまま盗まれたんです。」

「不思議なこともあるもんだ・・・とにかく、お宅にお邪魔させてもらいます。」

「はい。ありがとうございます。」

母親が言い切らないうちに、向こうで電話を切った音がした。警察は、よっぽど忙しいのだろう。

「信二、警察のひとが来てくれるそうよ。」

「そうか、そりゃあよかった。」

シンベエは、それだけですっかり安心し、子供部屋に戻ってコミックを読み始めた。

コミックを読んでいる途中、下でピンポンの音がした。警察だろう。だがシンベエは出ず、母親が警察に事情を話した。

次の日、シンベエは学校でゲーム機をとられたことを、クラスメイトに言ってまわった。

みんなの反応は、

「ええ？マジで？やばいじゃん。」

「シンベエも大変だな・・・」

といったものが大半であったが、一人、窯元達也だけは違った。

「俺な、昨日ゲーム機盗まれたんだぜ。」

「・・・。」

シンベエが言ったことについては、窯元は何も言わなかった。

だが、シンベエからは、窯元が少しだけギクツとしたように見えた。

「お前・・・まさか盗んだんじゃないんだろうな？」

「・・・ごめん、ぼくが盗んだよ。」

「お前なあ！ふざけんなよ！ボコボコにしてやろうか。」

「ごめん・・・実はね、中学生からおどされてて・・・」

「中学生からおどされるだあ？嘘付け！」

「いや、それが本当なんだよ・・・昨日、きみがゲームソフトを買っていたのを中学生が見たらしくて、通りすがりのぼくにたまたま

言ったんだ。『お前、ちょっとあいつのゲーム機奪って来い。』だから、ぬすんだのはぼくだけど、きみのゲームをもっているのは中学生たちだよ。』

「くっそお！中学生のやろうどもめ！絶対に、ボコボコにしてやる！」

「やめといたほうがいいよ。それより、警察に知らせたほうが・・・」

「そうか、じゃあ俺、今日帰ったら交番に言って、警察のひとにそのことを言ってくる。」

「あ、あの、その・・・ごめんなさい・・・。」

「そんなにあらたまらなくてもいいぜ。悪いのは、その中学生どもだ！」

「うん。弁護してくれて、ありがとうね。」

二人は、そこで会話をやめた。

シンベエは、ぶーちゃんとホーリーに別れをつげ、家に帰ってランドセルを廊下に投げ捨てると、真っ先に交番へ向かった。

シンベエは、警察官にそのことを伝えた。

そして、次の日の夕方、朗報が来た。

ピンポンとなったので、母親がでていくと、外には警察官がいた。最初は母親が警察官と話をしていたが、突然シンベエが呼ばれた。

「君、その中学生は、補導されたよ。はい、これゲーム機ね。」

「やったー！とりかえしてくれてありがとう。」

「どういたしまして。では、私はここで戻ります。」

そういうと、警察官は帰っていった。

シンベエは、にこやかな表情で、「ドラゴンRPG」をゲーム機にさしこみ、ピコピコやりはじめた。

「よかった、残ってた・・・」

シンベエのやったデータは、残っていた。だが、作った覚えのない二つめのデータファイルがあった。

「なんだこりゃ？やってみよう。」

始めたとき、「ゆうしゃ」は「おうさま」の前にいた。

『おお勇者よ！魔王を倒してくれたか。これで世界は平和になった。』

上のようなメッセージが出たあと、画面が黒くなり、真ん中に大きく「THE END」という文字が表示された。

「中学生のやつら、ちゃっかりエンディングまでやってやる。」
シンベエはそう言うと、自分のデータで再びゲームの続きをやりはじめた。

第3話：学校の怪談

ここ今治小学校では、二時間目が終わったあとの休み時間のことを「今治タイム」といい、普段の休み時間より10分長い。そのため先生の説教や授業が多少延びても、運動場へ遊びに行くことができるのだ。

シンベエは、今日の今治タイムでは、運動場に降りなかった。なにやら、教室のすみっこで、ぶーちゃん達と話をしている。

「なあ？確かめてみようぜ。」

「うーん・・・ぼく、こわいよ。」

「ぼくも反対だな。だいいち、先生に見つかったら、どれだけ怒られると思っているの。」

「だ・か・ら、見つからないように行くんだよ。夜中とかなら、先生もいないだろう。」

「でも、お父さんたちに何を言ったらいいんだよ。」

「夜中にこっそり抜け出すのさ。」

「ええ・・・ぼく、そんなことできないよ。」

「いいからいいから。これも『学校の怪談』を確かめられるいい機会なんだし。行こうぜ。」

「しかたないなあ。今日だけつきあうよ。」

「ええ？ホーリーちゃんも行くの？じゃあ、ぼくもいこうかなあ・・・」

「よし！決まり！今日の夜中二時に集合な。」

どうやら、「学校の怪談」とやらを確かめるために、夜中に学校に潜入するようだ。

その日の夜一時半、シンベエはこっそり家を抜け出した。そして、なるべく音がならないように玄関のドアをあけると、小さ

な声でこういった。

「母ちゃん、父ちゃん、行ってきます。」

その十分後、ホーリーとぶーちゃんは同時に家を出た。

一階で待ち合わせする予定だったようだ。

ホーリーとぶーちゃんは、自転車にのり、並んで走りながら今治小学校を目指した。

ホーリーとぶーちゃんが今治小学校へつくと、シンベエはもう既に中に入っていた。

「お前ら遅いぞ。ほら、校門の隙間から中に入れ。」

やせているホーリーはぐりぬけることができたが、ぶーちゃんがぐりぬけるのには、ちょっと苦労した。

やつのことでぶーちゃんも通り抜け、三人は四階のすみっこにある音楽室へと向かった。

歩きながら、シンベエは言う。

「夜中の二時から三時ごろに音楽室のピアノを弾くと、弾くのをやめてもピアノは引き続けるらしいんだ。まずそれを確かめにいこうぜ。」

「こわいよ。」

「大丈夫だよーちゃん。物理的にこんなのあるえないもの。もし本当だったとしたら、鍵盤が勝手に動く特殊なピアノなんだよ。」

こんなことを言っているうちに、四階についた。

シンベエが、おそろおそろ音楽室のドアをあける。

ギィィ・・・不気味な音がして、ドアがゆっくりと開いた。中をのぞいてみると、真っ暗で、かなり不気味だ。こんなときにピアノを弾くのは、少々気がひける。

ピアノをちょっとだけ弾くことのできるホーリーが、ピアノを弾く

ことになった。

「ちょっと気がすまないけど、弾いてみるよ。」

ホーリーはおっかなびっくり、ピアノを弾いてみた。

三十秒ほどの短い曲を弾いて、おそろおそろ指の動きをとめてみる。

・・・何も音がしなかった。ホーリーたちはほっとして、音楽室を出る。

「怖かったー。ホーリーちゃんが指を鍵盤からはなしたとき、心臓がとまるかと思ったよ。」

「なーんだ。つまんねーや。」

「これで、音楽室の怪談はうそだということが証明されたね。」
こう話しながら音楽室のドアを閉めた時。

ド

「あれ？今、ハ音が聞こえた気がする。」

「ハ音って何？ホーリーちゃん。」

「ハ音っていうのは・・・まあ簡単に説明すると、ドの音だね。」
「そうかー？おれはきこえなかった気がする。」

レ

「ほら！またきこえた！」

「ぼくもきこえた！シンベエちゃんはきこえなかったの？」

「え？おれは別に・・・」

ミ

「・・・こんどはホ音だ。」

「うわああああ。またなったよ。こわいよ。」

「おれも聞こえた。ちょっとピアノ確認してみろよ。」

「ぼくはこわいからそんなことできないよ。」

「ぼくも確認したいけど、やっぱり怖いなあ。」

「ホーリー、理屈っぽいこと言ってたわりには、怖がってるじゃないか。」

「いや、こんな非現実的なことがおきたら、誰だって怖いと思うよ。」

「ヒゲンジツ？なんじゃそりゃ。」

「ありえないようなことって意味。」

「ホーリーは難しい言葉ばかり使うんだから。」

ファ

「これは絶対怪しいね。三人で入ってみようよ。」

ソ

「うわあああ。だんだん音のなるテンポが早くなってる。」

ラ

「入ろう。」

シ

「もう少しで二回目のハ音だ。」

ド

最初になったドの音より、一音高いドの音になった。

それと同時に、ホーリーが音楽室のドアを開ける。
ドアの不気味なきしみ音が、三人を怖がらせる。

三人はピアノを確認してみる。いくら待っても、音はならないようだ。

「いったい何が原因でなったんだろう？」

「これが怪談なんだって。ホーリーは、なんでもかんでも『原因』とか『科学的』とかつけすぎだ。」

「うん・・・でもぼくは、怖かったよ。」

「とにかく、こんな不気味なところには居てられないから、次の怪談のところへ行こうよ。」

「ああ、そうだな。次の場所はと・・・家庭科室だ。まわりが暗くなっている時に家庭科室のドアを開けると、女のひとの泣き声聞きこえるらしい。」

「ふーん、じゃあ行ってみようか。」

そうホーリーが言ったとき、レの音がきこえたような気がした。

「早く行って、早く終わらせようよ。」

三人は、階段をかけおりた。

音楽室の真下にある家庭科室の前についた。だが、誰もドアを開けたりしないので、誰がドアをあけるか、公平にじゃんけんで決めることにした。

「さいしよは・・・」

「パー！」

「あっ！シンベエちゃんずるい！さいしよはグーだよ！」

「えー？おれは今までずっと、さいしよはパーをだすんだと思ってただけだなあ。」

「シンベエくん、きみ、昨日おにごっこの鬼を決めるとき、さいしよグーを出さなかったっけ？」

「えっ。あっ。いやー、あのときは、『さいしよは・・・』の一連

がないかと思って、だそうと思っていたグーを出したんだ。」

「とにかく、もう一度じゃんけんするよ。」

「さいしょは・・・」

「グー！」

「いんじゃん・・・」

シンベエとぶーちゃんはグー、ホーリーはチョキを出した。

「あっ、ホーリーちゃんの負けだ。」

「しかたないなあ。開けてあげるよ。」

ホーリーは、おっかなびつくり、家庭科室のドアをあけた。

・・・何の音もしない。家庭科室の怪談は、どうやら嘘であったようだ。

「なんだ、つまんねーの。」

シンベエがそう言った時。

シクシクシク・・・

とても小さな、若い女の人の泣く声が聞こえた。

「お、おい・・・」

「うん・・・」

「逃げよう・・・」

「うわーっ！」

三人は、全速力で走った。

家庭科室からだいぶはなれ、三人は走るのをやめた。

そこで、シンベエが口を開く。

「後はトイレの怪談だけだ。午前四時四十四分四十四秒に、四階の西にある男子トイレの、前から四番目の個室に入ると、トイレから手が出てくるらしいんだ。」

「わー、それこわいね。でも、さすがにそんなことはないと思うよ。」

「だけれど、さっきまでの二つの怪談は、全部本当だったじゃないか。あんなの、ありえないと思ったんだけどね・・・」

「そのトイレに行ってみようぜ。」

シンベエは、走って階段をのぼっていったが、ぶーちゃんとホーリーは、少し疲れたようすで、かなり遅いスピードで階段を一段ずつ、ゆっくりとのぼっていった。

三人は、四階の西にある男子トイレに入ったが、ぶーちゃんとホーリーはおじけづいたようすで、必然的にシンベエが個室に入ることになった。

しかし、今はまだ夜の二時半。三人は二時間以上待つはめになった。

四時四十四分三十秒になった。シンベエは、個室に入る準備をする。四時四十四分四十四秒。シンベエは、ものすごい勢いで、個室に入った。

だが、何もおきない。

「なんだ、何もおきないじゃないか。」

「おっかしいな。おれは、一番ありえそうだと思ったんだが。」

「いや、物理的に考えると、一番ありえないじゃないか。」

「それを言ったら、家庭科室のあれや音楽室のあれだって、物理的におかしいじゃん。」

シンベエがそう言ったとき、後ろから男子の笑い声がした。

「クククク。お前ら、まんまとだまされたな。」

「はあ？」

「音楽室のピアノも、家庭科室の泣き声も、全部俺たちがやったのさ。」

笑い声の主は、西田良一だった。周りにも、数人の男子がいる。

「お前たちが、今治タイムに夜中に学校に侵入することを話してたの、きいてたんだよ。それで、おどかそうと思ったんだ。」

「だけれど、音楽室にも、家庭科室にも、誰もいなかったよ。それに、家庭科室の泣き声は、女のひとの声だったし。」
ぶーちゃんが言う。

「ふふ、泣き声は、こいつが言ったのさ。」

西田は、後ろにいた中森伸介をあごでしゃくる。

「ぼくの声、とても高いから……。だから、女に、きこえるんだよ。」

「誰もいなかったのは、何故？」

「ふふふ、お前ら、暗いから気づかなかったんだよ。」

「なんだ、つまんねえの。」

次の日、シンベエたちは親にうんとしかられた。

どの親も、夜中に抜け出していたのを見ていたらしい。

更に、シンベエたちは、学校でも先生に、西田たちごとうんと説教された。

シンベエたちは、夜中に学校に侵入することが、いかに悪いことであるか思い知らされた。

第4話：危うし！ホーリー

四月十八日金曜日。今日はおとといやったテストが返される。ホーリーは、テストの結果を楽しみにしていた。

一時間目。この時間の授業は、音楽。クラスメイトは音楽室へ行き、歌を歌ったり、リコーダーを吹いたり、ピアノを弾いたりする。だが、ホーリーはテストを返されるのが待ち遠しくて、楽しいはずの音楽の授業が、苦痛に感じた。

二時間目は、算数。三時間目は、体育。まだ、テストが返される時間は、やってこない。

ホーリーは、やっている勉強が頭に入らなかった。体育では、普段は何かを失敗することはないホーリーが、この日はかなりの失敗をした。ハードルは何度も倒すし、ボールは一メートルも投げられない。テストを返されるのが待ち遠しすぎて、ホーリーはどうかしてしまったようだ。

体育が大好きなシンベエは、体育でかなり失敗をしているホーリーが気になって、ホーリーになぜあんなことになったのか、きいてみた。

「おいホーリー、今日、お前、どうかしてるんじゃないのか。ハードル、得意なんだろう。」

「う、うーん・・・今日、テスト返されるでしょ。あれが、待ち遠しくて、待ち遠しくて・・・何か、ぼーっとしてしまったんだ。」

「けっ。テストなんざ、どうでもいいや。」

「そりゃあ、きみは点数なんてわかりきっているから、気にならないだろうけど。」

「なんだとお。その言い方はないだろ、ホーリー。」

「きみこそ、『どうかしてるんじゃないか。』という言い方は、ひ

どいと思うけどなあ。」

「……。」

二人の会話は、そこで途切れた。

四時間目。テストを返す時間が、やってきた。

理科のテスト、社会のテスト、国語のテスト、算数のテスト、家庭科のテスト、さまざまなテストが返された。枚数は、一人あたり十枚にもなった。

だが、ホーリーのテストの点数は、あまりかんばしくなかったようだ。

国語のテストが、六十二点と七十八点。算数は、八十五点。理科は、五十点が二枚。社会のテストは、二十点、二十五点、十五点。家庭科のテストは、十点が二枚と、かなり悪い結果になった。特に、社会と家庭科がひどかった。

ホーリーは、かなり落ち込んでしまった。

放課後、ホーリーはのろのろとランドセルに教科書をつめ、せおつてからとぼとぼと歩き出した。

シンベエとぶーちゃんが、それについていく。

「はぁ……。今回も、点数が悪かった。社会は、結構自信があったんだけどなあ。」

「ホーリーなんてまだマシだぜ。俺なんて、社会は全部0点だったもの。」

「シンベエちゃんの点数なんて、参考にならないよ。」

「おい、ぶーちゃん、お前意外と口悪いな。」

「だって、事実だもん。」

「うっ……。弱いところをつきやがって……。」

「もう、けんかはやめてよ。」

ホーリーがそういうと、一人で早足に、先へ行ってしまった。

「なんでえ、あいつ……。」

シンベエとぶーちゃんが見えないところまで行ったホーリーは、足を進めるのを普通のテンポにもどした。

そこで、突然横にあった車から手がでてきた。ホーリーは、その車にのせられ、発車してしまった。

「いいかてめえ。助けを求めたら、殺すぞ。」

運転しているらしき人物が、右手でハンドルを操りながら、左手で包丁をとり、ホーリーにつきつけた。

（大変だ。誘拐されてしまったんだ。）

「おっと忘れてた。場所がわからないようにしないとな。」

運転しているひとが、車をとめ、ホーリーに目隠しをする。ついでに、猿轡さるぐつわもされてしまった。

三十分ほど走っただろうか。車がとまった。

ホーリーは、抱きかかえられるようにして、誘拐犯に連れて行かれた。

なにやら建物に連れ込まれたようだ。エレベーターのような音がしたので、マンションだろうか。

「いいか、声を出したりしたら、絶対に殺すからな。静かにしてろ。」

誘拐犯はそういうと、ホーリーを縄でめっちゃめっちゃにしばり、蹴飛ばした。

「おいぼうず、てめえの名前と電話番号、住所を教えろ。」

誘拐犯は、ホーリーの口についている猿轡をはずした。

ホーリーが自らの名前と、自分の家の電話番号を言うと、誘拐犯はもう一度ホーリーに猿轡をつけ、目隠しをはずしたあと、どこかへ行ってしまった。

遠くの方で、小さな誘拐犯の声がした。

「お前の子供をあずかっている。助けてほしければ、身代金5000万円を明日までに用意しろ。もし、警察に通報したり、身代金を

明日までに用意しなかったりすれば、お前の子供の命はない。いいか、5000万用意するんだぞ。5000万。明日の夕方七時に、お前の家にお邪魔する。」

（あいつは、ぼくを人質にして、ぼくの母さんと父さんに身代金を要求するつもりなんだ。もしかして、ぼくは殺されるかもしれない。）

ホーリーは、そう考えると、身震いがした。そして、いつのまにか、眠ってしまった。

おきると、あたりが真っ暗になっていた。どうやら、夜中らしい。誘拐犯は、眠っているようだ。今のうちなら、逃げられるはず・・・ホーリーはおきあがると、ピョンピョンと、なるべく音がしないようにとびはねて、玄関の方へと向かった。

「んごおー。」

どこかから、誘拐犯のいびきがきこえてくる。相当音が大きいいびきだ。ホーリーは、かなりびっくりしてしまった。

玄関の前まで来た。かぎがかかっているが、中からなので、はずせるようだ。

だが、手が後手に縛られていて、自由に動かせない。縄をほどけば、かぎをあけられるかもしれないが、これだと、あけられるはずがない。

突然、外でエレベーターの動く音がした。誰かが来たのだろうか。

ここは、誘拐犯が起きるのを覚悟で、助けをもとめるしかない。

ホーリーは、体ごとドアにぶつかり、「助けてー！」と叫んだ。

だが、反応がない。気づかなかったのだろうか。

「う、ううーん。」

誘拐犯が起きたようだ。ホーリーは、急いでさっきいた部屋にもどる。そして、寝転んで寝たふりをした。だが、寝たふりをしたつもりなのに、いつのまにか、眠りについてしまっていた。

しばらくして、起きてみると、体に巻きついていたはずの縄はなく、口についていたはずの猿轡もない。なぜか、自宅にいた。もしかして、誘拐は夢だったのか・・・？

しかし、目の前にいた母親がそばに近づいてきて、ホーリーを抱いた。

「一郎・・・おきたのね、一郎・・・助かってよかった・・・。」

「え・・・？ああそうか、ぼくは誘拐されてたんだっけ・・・どうしてぼくは助かったの？」

ホーリーは一瞬戸惑ったが、このとき一番ききたかったことを母親にきいてみた。

「あなた、誘拐犯の家で外に助けをもとめたでしょ。あのとき、外にいた人がそれに気づいて、警察に電話してくれたの。とにかく、何もなくてよかったわ。」

「え・・・あ、そうなんだ。」

「それで、誘拐犯は警察に捕まったわ。一郎、私の大切な一郎・・・助かって、本当によかった。」

母親はそう言うと、ギュッとホーリーを抱きしめた。

ホーリーの顔が、少し赤らんだ。

第5話…ぶーちゃん、入院す

六時間の勉強を終えたシンベエたちは、今日もホーリー、ぶーちゃんと一緒に並んで帰路についていた。

「今日の授業はひどかったなー。ナカセンの奴、 $50+23$ もわかんねえのかよ。」

ナカセンとは、シンベエたちの担任である中井哲郎先生のことである。

「ほんとだよねえ。いくらぼくでも、 $50+23$ を 82 なんて書かないよ。先生は、いったいどんな勘違いをしてしまったのかなあ。」

「人は誰だって間違うこともあるさ。運動の得意なきみだって、ボールを投げ損ねたりするだろ。」

ホーリーが、シンベエにきつい口調で言う。

「あ、あれは足がつまづいたときとかだけだ。ふ、普段は、あんなことしないもんね。」

「シンベエちゃん、ホーリーちゃんに言われてくやしいんだ。」

「なんだとお。ぶーちゃんなんて、体育全然できないじゃねえか。」

「そこまできつくいわないでもいいじゃないか。シンベエくんだって、勉強の方はてんで駄目でしょ。」

「それは、お前もだろ。この中では、まだぶーちゃんが一番ましだ。」

「へへ、シンベエちゃん、ぼくのことほめてくれた。」

しかしこの三人、仲がいいのか悪いのか。いつもけんかしている印象がある。

とそこへ、一台の白いベンツがやってきた。そして、ぶーちゃんにあたったあと、そのまま違う方向へと走りさってってしまった。

「うわああ!」

「ぶーちゃん!」

「くっそう、ひき逃げか！」

「よし！」

ホーリーは、持っていたメモ帳に、鉛筆で車のナンバーを書く。だが、全て書くことはできなかった。

ホーリーとシンベエは、ぶーちゃんに話しかけたが、ぶーちゃんは、返事をしてくれない。気を失っているようだ。

「とにかく、119番だ！その辺の家にでも駆け込んで、電話しなきゃ！」

「おじゃまします！」

ホーリーは、近くにあった家にお邪魔すると、電話で119番通報をした。

「もしもし。救急ですか、消防ですか。」

「救急です。ぼくの友達が、車にあてられて気を失っているんです。車は、そのまま逃げて行ってしまいました。」

「場所はどこですか？」

「西京県八王山市、今治6-3-29です。」

「今すぐ、救急車を出動させます。それまで、その場所から動かないでください。」

相手はそういうと、電話がプツリと切られた。

「どうだった？ホーリー。」

「今すぐ救急車を出動します。だってさ。」

「ぶーん。ぶーちゃん、大丈夫かなあ。」

ぶーちゃんは、全く動いていない。

あたりから、たくさんのひとたちが、見物にやってくる。

「こちらこちら！みせもんじゃないから、こっちくん。シッシッ。」
チビどもが近づいてじーっと見ているのを、シンベエが注意する。

そこへ、救急車が到着した。来るのも、だいぶ早いものである。

ぶーちゃんは、たんかにのせられて、救急車で運ばれていった。

「ぶーちゃん……。」

二人は、救急車を見送ると、大急ぎで家に帰り、そのことを親に伝

えた。

「えっ？反吉くんがひき逃げされた?!」

「中田くんが事故?!」

「あんたここで何してるの!そんなに大事なことから、すぐに119番通報しなさい!」

「いや、119番通報はもうしたんだ。ぶーちゃんは、救急車で運ばれていった・・・」

「まあ・・・中田くん、お大事に・・・」

その頃、ぶーちゃんは猛スピードで走る救急車の中に居た。

救急車に運び込まれて10分ほどたったとき、病院についた。

ぶーちゃんはひどい打撲と、複雑骨折をしてしまったようだ。なので、即、入院ということになった。

複雑骨折は、ほうっておいてなおるものではない。ぶーちゃんは、手術することになった。

入院してから、二日後。

「う、うーん。」

「起きたのね、反吉・・・」

「母さん・・・。ぼく、はねられちゃった・・・いたたたた。」

「あまり動いちゃだめよ。今日は、手術があるわよ。」

「えー。手術? ぼく、手術こわいよー。」

「大丈夫。手術はいたくないし、体もなおるわよ。」

「う、うん。ぼく、手術頑張る。」

「うん。頑張って。」

それからしばらくしてから、ぶーちゃんは全身麻酔をうたれ、手術室へ連れて行かれた。

「メス。」

「ガーゼ。」

手術室では、早速手術が開始された。医者たちの声は、若干緊張している。複雑骨折の手術は、難しいのだろうか。

ぶーちゃんの母親は、手術室の外のいすで、静かに座っていた。横には、姉さんもきていた。

「ねえ、反吉、いったいなにしかして、こんなはめになったの？」

「反吉がわるいんじゃないのよ、純子。反吉は、ひき逃げされたの。」

「えええ？ ひき逃げー？ それ、大変じゃない。犯人のやろう、捕まったらボコボコにしてやるんだから。」

「ああ、そういえば、手術には、五時間ほどかかるらしいわよ。待つのがたいくつだったら、本でもよんでおきなさい。」

「そんな、反吉が手術しているのに、本なんか落ちついて読めないわ。」

「それなら、静かに待っておきましょう。」

五時間ほどたった。手術が終わったようだ。

医者が出てきて、手袋を脱ぎながら言う。

「手術は、成功しましたよ。」

「まあ・・・ありがとうございます。」

「ありがとうございます！ 反吉・・・」

そこへ、ぶーちゃんと同じクラスの五年一組のめんつがたくさんやってきた。

「ぶーちゃん、どうしたの？」

「中田ー、だいじょうぶかー！」

「反吉くうん。」

精神年齢が低い五年一組のクラスメイトは、場もわきまえず騒ぎ立てる。

「反吉の手術は、成功したわ。」

「あとは、一週間ほど入院すれば大丈夫です。」
医者が言った。

「ええー、あと一週間も、ぶーちゃんにあえないの？」

「よかったー、一ヶ月とか、一年とか、入院するかと思った。」
それにしても、うるさい子供たちだ。

ぶーちゃんは、病室へ連れて行かれた。

三日後、ぶーちゃんの病室に、朗報が届いた。

ひき逃げの犯人が捕まったのだ。

ぶーちゃんだけでなく、ぶーちゃんの家族、五年一組のクラスメイトまで、喜んでくれた。

「やーいやーい、ぶーちゃんにひどいことしたからだ。」

「犯人なんて、死んでしまえ。」

「『死んでしまえ』なんて言っちゃだめだよ。」

ぶーちゃんは、絶えず笑顔であった。

更に四日後、ぶーちゃんは退院することができた。

打撲の痛みもなくなり、骨折もなおったのだ。

そこへ、ひき逃げの犯人が手錠と腰縄をされて、やってきた。

「あの・・・その・・・誠に申し訳ありませんでした！」

ひき逃げの犯人は、深々と頭をさげる。若干言葉がつまるところが、

ぶーちゃんに似ている。

ぶーちゃんが言った。

「いいですよ。僕の体もなおりました。」

なんとやさしいことか。自分をこんな怪我させた、につくきひき逃げ犯人であるはずなのに、ぶーちゃんは全く怒りもせず、やはりずっと笑顔であった。

それからしばらくして、ぶーちゃんが病院の出口から出たとき、外

にたくさん五年一組、いや、五年生全員の生徒と、校長先生や、担任の先生が来ていた。そして、みんなで声をあわせて言った。

「中田反吉くん、退院おめでとー！」

「ありがとう。」

ぶーちゃんは、涙を出しながら言った。

第6話：災難だった遠足

今治小学校では、四月二十二日に五年生の遠足が実施されている。毎行き先は変わるが、大抵の場合学校から近い。

だが、今年は違うようだ。

「明日遠足だね。」

「正直いって、学校の遠足なんてつまんねーんだよなあ。」

「ぼくも、あまりおもしろくはないと思う。」

「行き先は、富士山遊園地だろ。遊園地なら、きみたちは楽しめるんじゃない。」

「学校の選ぶ遊園地なんて、つまんないさ。ジェットコースターとかも、ボロボロじゃねえの。」

「結構遠いしねえ。電車で二時間もかかるんだから、ほとんど遊べないようだねえ。」

「きみたちは、文句が多すぎだよ。昔の子供達なんかね・・・」

「はいはい、その昔の子供達は今、おれたちにでかい態度とってやがるんだから、それでいいじゃないか。昔のことを引っ張り出してあーだのこーだの言うのは、最低だ。」

「ぼくたちに、昔のひとたちのことなんか、関係ないよね。」

「もう・・・きみたちは、本当に困った子供なんだから・・・」

「大人みたいなこというなよ、ホーリー。」

遠足当日。三人は、朝早くからリュックを背負って学校に来ていた。「おお、ホーリーとぶーちゃん。お前らにしてはだいぶ早いじゃないか。」

「遠足のときって、ついはりきって早く来てしまうよねえ。」

「コホン。別に、ぼくははりきって来たわけではないけどね。遅れたら、おいていかれるもの。早めにきておいたほうが、安心だろ。」

「またまた、ホーリーはへりくつ言って。」

出発時間になると、五年生のそれぞれのクラスの生徒が、背の順で並び、八王山駅へとそろそろと歩き出した。

それぞれの生徒が、好き勝手喋っている。先生は、そのたびに注意におわれる。

「こらっ！道ばたでは、静かにせんか！」

注意されるたびに生徒は「すいませーん。」と言ってお喋りをやめるのだが、先生がはなれたあとはお喋りを再開する。

駅へつくと、お喋りはますますうるさくなった。駅全体が屋根につつまれているため、声がよくひびくのだ。

先生も、負けじと注意するが、その声自体も、まわりのお客さんの迷惑になっている。

「あー、また中央線にのるのかよ。この電車、ぼろっちつくて嫌なんだよな。」

「中央線に使われている車両は、103系と201系で、どちらかといえば201系のほうが・・・」

えらくマニアックな声もとびかっている中、シンベエたちは、遊園地についたら何をするかについて、話し合っていた。

「おまえらは、何にのるんだ？結構、おもしろそうなアトラクションもあるみたいだが。」

シンベエが、あらかじめもらっていた富士山遊園地のパンフレットを、ぶーちゃんとホーリーにビラビラと見せる。

「ぼくは、FUZISANにのりたいな。高さ100メートルのすごいジェットコースターなんですよ。」

「ぼくは、ジェットコースターにはのらないよ。万が一事故でもあれば、危険だからね。」

「へっ、事故事故いってりゃあ、電車にもめなくなるよ。」

シンベエが、目の前のオレンジ色の電車を指さす。

「だって、この前、どこかの遊園地でジェットコースターの事故あ

ったでしょ。作業員のかたが、大怪我した。」

「作業員だったら、おれたちには関係ないぜ。なっ、ぶーちゃん。ぶーちゃんは、こっくりとうなずく。」

「まあ、ぼくはジェットコースターはあまり好きではないからね。はなから乗るつもりはないさ。」

「やっぱり怖いんだ、ホーリー。」

「怖いんじゃないくて、わざわざ何時間も並んでまであんなものに乗りたいくないからだよ。」

ホーリーがそう言ったとき、オレンジ色の電車がやってきた。

「この電車は、特別快速大里行きです。停車駅は・・・」

「大里行きなら、大里で富士線にのりかえなければいけないなあ。

直通の特急電車にのさせてくれればいいのに。学校には結構お金払ってるんだから、それくらいのサービスはしてくれなくちゃあ。」

「へえ、ホーリー、結構電車とか路線とかに詳しいんだな。」

「そりゃあ、地元なんだから、嫌でも覚えちゃうよ。」

「おれは、『大里』っていう地名も、富士山に遊園地があることも、今まで知らなかったぜ。」

「ぼくも、今までは知らなかったよ。富士山に遊園地があるだなんて、おどろきだったよ。」

「富士山遊園地は、結構最近にできたものだし、知らないのもむりないかもしれないね。」

三十分ほどして、大里駅についた。

「この駅でおるぞー！」

先生のとなり声が聞こえる。公共の場なのだから、もう少し声を小さくしてもらいたいものだ。

大里駅に降りたった。この駅は八王山市からそこまではなれていないのだが、かなりのどかである。

この電車を降りると、目の前の電車に乗り換えさせられた。これに乗ると、やっと富士山遊園地につくらしい。

「きったねえ。なんだよこの電車。」

この電車は相当古そうで、いつこわれるかわからない。

「しかたないよ。多分、鉄道会社にお金がないのさ。」

「電車のことは、どうだっていいよ。ただの、移動手段なんだから。」

ここで、電車が出発した。

ものすごい揺れだ。本当に、こわれるかと思ってしまう。

「うおうおうお！おおう」

あまりにひどい揺れのせいで、シンベエは思わず変な声を出してしまった。

電車は、ぶんぶんと上下左右に揺られているにもかかわらず、かなりのスピードでぶつとばしている。

「時間からして、富士山遊園地につくのはあと一時間半だね。やっぱり、長いなあ。」

「ふあーあ。おれは、べつにそこまでして遊園地に行こうとも思わないなあ。去年は、近くにある高野山の登山だから、移動は楽だったんだろうな。」

「そうだねえ。でもぼくは太っているから、登山は大変かもねえ。」
ぶーちゃんが、少し悲しそうな表情で言った。

ここでシンベエが、ため息まじりに言う。

「こんなにすいているのに、どうして座っちゃ駄目なんだよ。一時間半も立っていたら、足がつぶれてしまうよ。」

「つぶれはしないけど、それには同意だね。満員電車ならまだしも、ぼくたち以外お客さんがいないのに、座ってはいけない理由なんてないじゃないか。」

「あっ！ナカセンのやろう、座ってやがる。自分だけ楽しやがってえー！」

シンベエが、顔を真っ赤にしながら足を床にどんとたたきつける。

ちなみにナカセンとは、シンベエたちの担任である中井哲郎先生の

ことである。

この小説を読みとおしている人には、おなじみかもしれない。

シンベエは、ぶつくさ文句を言いながら、座席に座った。

「あつ。シンベエちゃん、座っちゃいけないよ。」

「ナカセンだって座ってるんだから、いいじゃんか。」

シンベエがそういったとき、ホーリーもどさつと座席に座った。

「ホーリーちゃんまで・・・ようし、ぼくも座る。」

ぶーちゃんも、どさつと座席に座った。

一時間半後、電車がやっと、富士山遊園地の最寄り駅である、「富士山遊園地前・河口駅」に到着した。ちなみに、「河口」は「かう」ではなく、「かわぐち」と読む。富士山のあたりの地名だ。

「あーっ、やっとついたぜー。ようし、ジェットコースターにのりまくるぞー。」

「疲れたなあ。もう、アトラクションにのる気力もなくなったよ。」

「何いってんだよ、ぶーちゃん。お前、FUZISANに乗るんじやなかったのか。」

「うーん・・・せつかくだから、乗っちゃおう。」

「そのいきだぜ、ぶーちゃん。」

富士山遊園地の入場ゲートの目の前で、五年生の全児童は、地べたに座らされた。土などで汚れているので、とても座りたくはないが、強制的に座らせられた。小学生の人権など、あつてないようなもののなかもしれない。

五年生の生徒たちは、地べたに座ると、先生たちからチケットをもらった。

「これをなくすと、のりものの全部にのれなくなるぞ。なくさないように。」

「どうやら、フリーパスのようだ。」

「それでは、お前ら行ってこい！」

中井先生が言うと、生徒たちはくもの子をちらしたようにちらばっていった。

「さっそくFUZISANのりにいこうぜ。」

シンベエたちは、入り口近くにあるジェットコースターを指さした。ホーリーは、ため息をついている。

FUZISANの入り口にあった看板を見ると、二時間待ちのようだ。

「えー。二時間待ちだよ。シンベエちゃん、どうする。」

「せっかく来たんだからのうぜ。ホーリーは、やっぱりのらないのか？」

ホーリーは、何も言わず、こっくりとうなずいた。

「それじゃあ、おれたちが行ってくるぜ。」

シンベエとぶーちゃんは、FUZISANの入り口前にあるものすごく長い行列に並んだ。

ホーリーは、その辺のベンチに座って、FUZISANに乗ってキヤーキヤー言っている人たちを、ながめていた。

約二時間後、ジェットコースターの巻き上げ部分をのぼっている箱のようなものがたくさんつながった乗り物の先頭に、シンベエとぶーちゃんがいるのが見えた。

ぶーちゃんは少々怖がつているようだが、シンベエは余裕のようだ。

「おーい、ホーリー！」

とても小さいが、シンベエの声がきこえる。ホーリーは、この声に気づいた。

「シンベエくん！ぶーちゃん！」

それから三十秒ほどすると、ジェットコースターが、100メートル地点と思われる、かなり高い場所へついた。

すると、地上にいるホーリーに、ガガガッという不気味な音が聞こえた。

音のものは、ジェットコースターのような。地上にいるにもかかわらず、聞こえるということは、相当大的な音のようだ。

シンベエの顔を見ると、かなり怖がっているようすで、ぶーちゃん
は、もはや泣き出してしまっている。

ホーリーには、それがジェットコースター自体を怖がっているのだ
と思ったのだが、それから三秒後にそれは違うということがわかつた。

ジェットコースターの方から、車輪がバラバラとおちてくる。車輪
は、ジェットコースターの線路の真下でボンボンとはねた。幸
い、誰にもあたらず、ゴロゴロと転がったが、車輪のないジェット
コースターは、ものすごい音をたてながら、線路を滑り落ちる。

「ギャー！」

どう考えても普通の悲鳴ではない声が聞こえた。まわりの人たちも
それに気づいたようで、スタッフに異常を知らせている人もいた。

ホーリーは、啞然としていた。

「大変だ……。シンベエくんたちののっている、ジェットコース
ターが……。」

ホーリーは、F U Z I S A Nの乗り場まで走っていき、スタッフに
そのことを一生懸命伝えた。だが、もうすでにスタッフはそのこと
を他の人から知らされていて、異常に気づいていたので、ホーリー
には見向きもせず電話であわただしく相手と話していた。

シンベエたちののったジェットコースターは、摩擦が大きかったよ
うで最初の落下だけですみ、一番下の部分でとまった。だが、小さ
な火のようなものが出ている。摩擦が大きかったせいか、火の手が
あがってしまったようだ。

降りれない高さではないでもないので、ある一人は降りようとした
が、降りるのに失敗したらしく下へ落ちた。

そこへスタッフがやってきて、消火器で火を消し、非常用ばしごで
乗客を降ろしてくれた。下に落ちた人は、すぐに救急車へ運び込ま
れた。

「こわかったよー。」

「やばかったぜ。死ぬかと思った。」

シンベエとぶーちゃんは、乗っているときのことをホーリーに話した。

このジェットコースター事故で、富士山遊園地はきゅうきよ休園となった。もちろん、遠足も中止になり、帰ることになった。

「つまんねーの。」

「事故だなんて、こわいなあ。」

「一組のシンベエとぶーちゃんが、そのジェットコースターにのっていたらしい。」

「死人も出たんだって。」

「車輪がボロボロと落ちたらしい。」

「ぼくは一部始終を見てただけど、こわかったよ。」
生徒たちは、好き勝手喋っている。

帰りの電車の中で、シンベエとぶーちゃんは事故がどんなものであったか、他の生徒に説明してまわった。

教室の中で、みんなはそれぞれの愚痴を言った。

「まだ一つものっていないのに、もう帰るなんていきなり言われて。電車にのっていた時間が、もったいないよ。」

「そんなあぶない遊園地なんかに学校で遠足でいくなんて、信じられない。」

「こらこら。静かにしなさい。今日の連絡だが、宿題はなしだ。今日は早く家に帰ることになる。保護者のかたがふしぎに思うかもしれないので、家で今日のことを話しておきなさい。では、解散！」
中井先生がそう言うと、みんなは教室を飛び出て帰路についた。

シンベエとぶーちゃんは自分の体験談を、ホーリーはシンベエとぶーちゃんが危なかったということを、自分の親に伝えた。

次の日、シンベエがニュースを見てみると、このようなニュースがやっていた。

「昨日、山田志県にある富士山遊園地で、ジェットコースターの事故がありました。」

このジェットコースターは、高さ100メートルの頂上から車輪を落とし、そのまま走行したのち、高さが低い部分でとまりましたが、車体から炎が出ていたということです。

けが人は出ませんでした。一人の方が死亡しました。

富士山遊園地は、この事故をうけ、しばらくの間休園し、場合によっては閉園をするとのことでした。」

「あ、これ、おれがあつた事故だ。しかし、昨日の遠足は何もいいことがなかったなあ。嫌な思い出ばっかりだよ。」

シンベエが、若干興奮しながら、独り言のように言った。

第7話：音楽発表会

今治小学校の五年生は、ゴールデンウィークの少し後に音楽発表会をすることになっている。

合奏や合唱などを、保護者に披露するのだ。

本番は、一回きりだが、練習は、とても辛いものだった。

四月二十四日。今日の時間割は、一時間目から四時間目まで音楽だった。

「四時間も音楽かよ。なんのために学校にきてるのやら。」

「保護者の中にはいい発表をみせたいけれど、四時間も練習したら、喉がカラカラになっちゃうなあ。」

「うーん、ぼく、音痴だから嫌だな。」

六年生の誰もが、こうして愚痴をもらしていた。

読書タイムが終わったあと、五年生は体育館へとつれていかれた。

そして、あらかじめ用意されていたたくさんの台にのって、合唱をしたり、合奏をしたりするのだ。

背の順とにたような並び方で、みんなが台にのっていく。

身長の高いぶーちゃんは、とんでもなく高い台にのせられた。

「ぼく、怖いよ。高所恐怖症なのに、どうしても高いところなの。合唱や、合奏なんて、できるわけないよ。」

「仕方ないよ。ぼくだって、怖いさ。」

となりに居た、鈴木章が言う。

「まず、合唱をするわよー。みんな、用意して。」

音楽の先生がなった。

みんなが用意をしておったあと、音楽の先生は指揮を始めた。

みんなが歌うより一足先に、伴奏のピアノがはじまる。

ピアノのメロディーがしばらく続いたあと、歌のゾーンがやってきた。

五年生の全児童は、力強く歌う。

みんなが一生懸命歌っているにもかかわらず、音楽の先生はヤジをとぼす。

「もっとしつかり！お腹に力を入れて！」

「そこ！ふざけて歌うんじゃない！」

「もっと声を大きく！」

合唱が終わったら、合奏が始まる。

五年生の全児童は、それぞれの位置につく。

ピロリロリ〜というリコーダーのメロディーにあわせて、大太鼓や小太鼓、木琴、鉄琴、ピアノが伴奏をする。

合奏については、先生は何も言わなかった。

このような練習が、ゴールデンウィークまで、毎日くりかえされた。三日もすると、生徒たちの声はガラガラになった。

「こらー！声をちゃんとしろ！」と音楽の先生は言うが、毎日四時間歌わされている生徒は、なおしうがなかった。

そして、音楽発表会当日。合唱をするとき、ゴールデンウィークまでは生徒の声がガラガラだったのだが、三日ほど休んだからなのか、生徒たちの声は回復していた。

合奏と合唱が終わったとき、保護者たちは盛大な拍手をしていた。

音楽発表会が終わると、生徒たちはそれぞれの感想をのべていた。

「辛かったけど、よかったね。」

「喉痛いよー。」

「拍手されたから、最後はうれしかった。」

そういったぶーちゃんに、シンベエがつっこみを入れる。

「へっ。拍手がなんだってえんだ。こんなに歌わされたら、歌嫌いがふえるだろうな。」

今の学校の音楽の授業では、生徒たちは音楽に親しみにくいかもしれない。

第8話…クイズ番組出場

五月十五日、とあるクイズ本が発売された。

「このクイズ本、おもしろそうだね。ぼくは買ってみるよ。」

「ぼくは、かわないね。クイズの本を買うより、問題集を買うほうが、お金の有効活用ができるよ。」

「おれは買うさ。ホーリーは、なんでもかんでも理屈にくっつけすぎだ。子供は、遊ばなければいけないんだぜ。ユーコーカツヨウだなんて難しいこと言っていないで、ホーリーも買えよ。」

「残念ながら、ぼくは買う気は全くないよ。何を言われても、買わないからね。」

シンベエとぶーちゃんは家に帰ると、さっそく本屋さんへ行き、クイズ本を買った。そして、家に戻ると、早速読み始めた。

クイズ本の内容は、このようなものだった。

「五月十五日は、太陰暦だと何月何日？」

「『いいえ』と書かれた紙がある。これを『はい』にするためには、どうすればいい？」

「沖縄県で、太陽の高さが一番高い時は何時？」

「火星が地球に接近するのは何年おき？」

「うるう年に生まれた人が、普通の年で93歳の時、実際には何回誕生日をむかえた？」

「アメリカ人が日本に来てびっくりしたことはなに？」

「世界一大きい岩は、実は地球のへそではない。実際の世界一大きい岩の名前は？」

意外なことに、なぞなぞだけではなく普通の問題まであった。

シンベエは、一瞬にして読んでしまったので気づかなかったが、ぶーちゃんが一番後ろのページにある紙に気づいていた。

その紙には、こうかかれていた。

「きみもクイズ番組に出演しよう！ここに名前と住所、電話番号を書いて、出版社におくってね。応募した人の中から抽選で決められた人が、クイズ番組に出場できるよ！」

ぶーちゃんは若干興奮ぎみに、母親にこの紙を見せた。

「母さん、これに応募したい。」

「あら、いいわよ。自分で出してきなさい。」

「うん、だけどぼくは住所と電話番号がわからないから、そこは母さんが書いて。」

「住所と電話番号くらい、覚えておきなさいよ・・・」

母さんは、ため息まじりに紙に自分の住所と電話番号を書いた。ぶーちゃんは母親が書き終わったのを確認してから、ひったくるように紙をとって、走って玄関を出ていった。

五月二十日。この前おくった紙が、かえってきた。

「おめでとうございます！あなたは、クイズ番組に出演することができます。五月二十二日に、ここに来てね。」

この文字の下に、西京県の中心部である新端市の住所がかかれていた。

「母さん！やったよ！」

「ん？何がやったの？」

「この前おくった手紙が、かえってきたんだよ。そいでね、クイズ番組に出演できます、って書いてあったよ。」

「まあ。じゃあ反吉は、クイズ番組に出演することになるの？」

「うん！」

ぶーちゃんは笑顔でうなずいた。

ぶーちゃんは、学校でさっそくシンベエとホーリーにそのことを話した。

「へえ、クイズ番組に出演かあ。頑張ってきてね。」

「くっそお！おれも、その紙があるってことに気づいてれば、クイズ番組に出演できたかもしれないのに。」
シンベエが、くやしそうに言った。

五月二十二日、ぶーちゃんとその母親、そして姉さんは、中央線に乗って新端市へと向かった。

新端駅のすぐ近くにある大きなビルの一階に、そのテレビ局はある。三人はエレベーターで一階へ行った。

テレビ局につくと、ぶーちゃんはクイズ番組の詳細を教えられた。

「クイズは、全部で二十問あります。全問正解すれば、十萬円の賞金もらえるので、頑張ってくださいね。だけれど、もしズルしたら、賞金はとりけしになります。ちなみに、生放送なので、きみがクイズをやっている間、テレビの前の皆さんにリアルタイムで見てもらえることになります。」

そして、放送の時間が来た。ぶーちゃんは、たくさんふしぎな形をしたいすのうちの一つに、座らされた。

そして、司会者がかん高い声で言った。

「さて、今年もやってきました小学生クイズ！今日は、二十人のみなさんに来てもらってます。左上から、佐藤浩二くん、井畑亮介くん・・・」

司会者が二十人全員の名前を言うとき、もう一人の人が言った。

「さて、さっそくですがクイズです！制限時間は三十秒です。問題一！クモの体は、いくつの部分で構成されている？」

二十人は、えんぴつの形をしたもので、目の前の画面に答えを書いた。

「正解は、二つです。」

ここで二人が不正解でリタイア、残り人数は十八人となった。

「問題二！制限時間は十五秒！68592ばいの牛乳と321658ばいのお茶を比べたらどっちが、どうなる？」

勉強の問題が出た。いくつかの子供が、首をかしげている。

「正解は、68592…321658です！」

この問題で、三人がリタイアした。これで、残り人数は十五人だ。

「問題三！レモンが酸っぱい理由は？制限時間は、四十秒です！」

やはり、何人かの子供が首をかしげている。少し、難しいようだ。

「正解は、酸があるからです！」

ここで、五人もの子供がリタイアをした。残り人数は、十人しかない。

「問題四！グリーグのピアノ協奏曲は、何調？制限時間は、一分です。」

ここで、えらく難しい問題が出た。

「正解は、イ短調です！おーっと、リアイアせずに残ったのは、あと一人！中田反吉くんであー！」

なんと、ぶーちゃんだけが、リタイアしなかった。

「問題五！フェラーリは、どこの国の会社？制限時間は、十秒です。」

ぶーちゃんは、半泣きの表情で答えをかく。わからないのだろうか。

「正解は、ドイツです！ここで、全員がリタイア！小学生クイズは、終了です！」

ここで、カメラはうつすのをやめたようだ。

「中田君、惜しかったですね。頑張ったで賞として、一万円をプレゼントします！」

司会者が言った。

遠くからこのようすを見ていたぶーちゃんの母親と姉さんは、とても喜んでいた。

第9話…ミステリートレイン

「ミステリートレイン？」

「そう、ミステリートレイン。行き先がわからない列車らしいぜ。どこへ行くか、お楽しみってな。」

ここは、西京県八王山市今治小学校。五年一組の教室の端っこで、シンベエ、ぶーちゃん、ホーリーの三人が、話し合っていた。

「今度三人でのりにいかねえか？面白そうだろ。」

「うん、のるのる。ホーリーちゃんは？」

「さあね。ぼくの母さんと父さんが、子供だけで行ってもいいって言ったら、行くことはできるけど。」

「またお前は、理屈ばかりつけて変なこと言うんだから。子供は大人の奴隷じゃないんだ。大人に束縛されて生活してても、楽しくないだろ。やっぱり自由が一番だ。」

「へえ、きみにしてはめずらしく難しい言葉を使うね。ぼくは行ってもいいと思っているんだけど、母さんと父さんが許してくれないと、外出することさえ許されないんだ。」

「けっ、つまんねーな。じゃあ、許可をもらったらついてきてくれよ。」

「あ、でもシンベエちゃん。チケットいるんでしょ？ぼく、チケットもってないよ。」

「大丈夫。おれがもらっておいた。」

「あ！三枚も！でもシンベエちゃん、三枚も買っちゃあ、お金がたくさんかかるでしょ。」

「いいや、たださ。定期券を持っている人は、手紙を出すだけで、抽選でチケットがもらえるのさ。おれんちの家族は全員定期券を持っているから、全員分出したら、全部あたっちゃったんだぜ。」

「へえ、シンベエちゃんすごい！ホーリーちゃん、せっかくシンベエちゃんがチケットを手に入れてくれたんだから、行ったほうがいい

いよ。」

「うーん・・・とにかく、許してもらってからね。」

どうやら、シンベエがぶーちゃんとホーリーを、ミステリートレインにのらないかと誘っているようだ。

次の日。

「シンベエくん、ミステリートレインの件についてだけどね・・・」

「ああ、やっぱり駄目だったか。そりゃあ仕方ないな。じゃあ二人で楽しんでくるぜ。」

「あ、いや・・・行けることになったんだけど・・・。」

「おいおい、そりゃまじか?! よっしゃあー! 念のためチケットをもってきてたから、一応渡しておくぜ。」

シンベエは、ホーリーに細長い「ミステリートレインチケット」と書かれた紙切れを渡した。

「出発時間は、明後日の日曜日の午前十時十分。新端駅から出発するらしいから、それまでに集合な。」

「うん、わかった。」

五月二十九日、午前九時。ホーリーとぶーちゃんは、早くも新端駅に到着していた。

「シンベエくんは、まだみたいだね。」

「そりゃあ、出発時間まであと一時間以上あるもの。」

「あ、そうだ、今考えてたんだけど、これ、帰りはどうするんだらう。」

「帰りの電車も、あるんじゃないの。」

ホーリーは、チケットを見た。すると、なぜかまゆをしかめた。

「・・・。帰りの電車は、六月一日だって。ってことは、月曜日と火曜日と水曜日は学校を休んじやうことになってしまふよ! あちゃい・・・。」

「うん、それに、帰る電車がくるまでの間、どこに泊まるの。」

「ホテルは既に用意されているみたいだから、大丈夫だけど……。ああ、帰ったら母さんと父さん、それに先生にしかられてしまう。ああ、どうしよう。どうしよう。」

「ホーリーちゃん、もう来てしまったものは、仕方がないよ。そんなことは忘れて、ここは思いっきり楽しもうよ。」

ぶーちゃんが、めずらしくいいことを言う。

「うん、そうだね……。」

そういつているうちに、目の前にオレンジ色の電車がやってきた。ドアが開くと、中からシンベエが出てきた。

「よう、お前ら。もうついてたのか。」

「やあ、シンベエくん。今は九時五十分だよ。」

「九時五十分ってことは、あと二十分か。早めに来ておいてよかった。」

「楽しみだねえ。」

約十分ほどすると、肌色に赤色のラインが入った、ふしぎなカラーリングの電車が入線してきた。

「うわあー、二階建てだあ。すごいねえ。」

「どこまで行くか、楽しみだねえ。札幌かなあ。高知かなあ。福岡かなあ。大阪かなあ。」

「中に入ろうぜ。」

電車の中に入ると、いくつかのドアがついていた。

「ありゃ……。？またドアがあるぜ。」

「この電車、寝台列車のようだね。このチケットに書いてある番号の部屋に入ればいいんだよ。」

「おれはC3か……。ぶーちゃんとホーリーは？」

「ぼくはC2だよ。」

「ぼくは、C1だね。」

「隣同士だな。」

「ぼく、みんな同じ部屋がよかった。」

「ぼくは、プライベートは誰にも見られたくないから、同じ部屋じゃなくてよかった。」

「あつ。ホーリー、こんなところにも問題集をもってきてやがる。」
「せっかくの楽しい旅なんだから、勉強なんかしなくてもいいのねえ。」

「コホン。では、ぼくは部屋に入るから、またあとでね。」

ホーリーは、部屋に入るとボタンと扉を閉めた。

「じゃ、おれも部屋に入るぜ。」

シンベエも、部屋に入った。

ぶーちゃんは部屋に入らず、この電車の中を見えることにした。

ぶーちゃんに乗った車両は、部屋が六つあるだけだった。その隣の車両も、その隣の車両も、そうだ。

だが、その隣の車両は違った。かなり開放的な空間で、ろうそくがともされた小さな花びんがある皿がのった、テーブルがたくさんある。テーブル一つにつき、いすが四つあった。

ぶーちゃんは、そばにいた女のひとに聞いてみた。

「あの、すみません……。これは、何の車両ですか？」

「食堂車です。十一時から十三時までと、十七時から二十二時までの間営業しております。」

列車のチケットをお見せしていただければ、何のメニューでも頼むことができます。

ただいま、営業準備中です。営業まで少しお待ち下さい。」

女の人はそういうと、ぶーちゃんに深々とおじぎをした。

「あ、教えてくれて、ありがとうございます。」

ぶーちゃんは、さらに隣の車両へ行った。

そこから三両は、最初の車両と同じようなところだったけれど、その次の車両は、ふしぎな空間になっていた。

すぐく大きい窓が左右に二つあって、それにあわせるように横向きの長いいすがおいてあるのだ。

いすの近くには、花壇もある。

ぶーちゃんは、この車両の入り口のすぐそばにあるいすに座った。

「どこに行くんだろう・・・。」

ぶーちゃんがそうつぶやいた時、電車が発車した。

三十分くらいすると、景色がだんだんのどかになってきた。

ぶーちゃんは、しばらくの間何も言わず、ぼーっと景色を見ていた。

「部屋にもどうかな。」

ぶーちゃんはそう言うのと、たくさんの車両を戻り、自分の部屋に入った。

部屋の中には、大きなベッドが一つ。お風呂場とトイレがあったし、大きな液晶テレビもある。さらに、机といすもあった。

「なんて豪華なんだ。乗ってよかった。シンベエちゃん、ありがとう。」

ぶーちゃんは、ベッドで横になった。

十二時十分、ぶーちゃんの部屋に、シンベエとホーリーがおとずれた。

「食事に行こうぜ。」

「ええ？ 食事！ 行こう行こう！」

ぶーちゃんは、満面の笑みで食堂車へ向かった。

食堂車のうちの一つのテーブルに座り、それぞれがメニューをのぞく。

他のお客さんは、十人ほど。意外に多くの人に乗っているようだ。

ホーリーは幕の内弁当、シンベエとぶーちゃんはフルコースAを頼むことにした。

三十分ほどすると、三人にそれぞれのメニューが運ばれた。

とはいっても、シンベエとぶーちゃんはフルコースを頼んだので、まだスープしかきていない。

「おいしそうなスープだねえ。」

ぶーちゃんが、舌なめずりをする。

ホーリーは、たくさんのおかずが入っている幕の内弁当を食べている。

シンベエとぶーちゃんは、スープを、スプーンも使わず、一瞬にして飲み干した。この二人は、テーブルマナーというものを知らないらしい。

続いて、二つのサラダが運ばれてきた。ぶーちゃんはおいしそうに食べるが、シンベエは見向きもしない。

「おれ、野菜嫌いなんだよな・・・。」

「せっかく運ばれてきたんだから、食べようよ。シンベエちゃん。」

「お、おう・・・。」

シンベエは、おそろおそろサラダをフォークで運び、口に入れる。

「あっ、意外とおいしい。」

「野菜はおいしいし、体のためになるんだよ。食わず嫌いせず、食べてよかったね。」

ホーリーが言う。

二人がサラダを食べ終わると、今度はパンが運ばれてきた。

はちみつ味のパン、フランスパン、スティックパンがある。スティックパンは、まるで棒のように細い。スティックパンの横に小さな容器があるから何だと思って見てみると、生ハムがいくつか入っていた。

ぶーちゃんは、生ハムをスティックパンにくるくるとまきつけ、口にした。

「うわー。シンベエちゃん、これ生ハムと一緒に食べると、すごくおいしいよ。」

ぶーちゃんが、はちみつパンをほおばっているシンベエに言った。シンベエは、ぶーちゃんがやったように、生ハムをスティックパンにくるくるとまいた。

「あ、うめえ。」

「ね？おいしいでしょ？」

シンベエとぶーちゃんがパンを全て食べ終えたころ、ホーリーは幕の内弁当をたிரらげた。

「やっぱり日本人は、和食だね。とてもおいしかったよ。」

「ううん、ぼく、夕食は、和食にしようかな。」

ぶーちゃんが、指をくちびるに押さえつけながら言った。

そこで、いよいよフルコースのメインディッシュが運ばれてきた。皿にのっているライス。大皿にのっているステーキ。そして、ステーキの上ののっている大きなフォアグラ。

「うわあああ！これ、フォアグラだよ、シンベエちゃん！」

「おお、すごい。おれ、フォアグラなんか食べるの、始めてだ。」

シンベエとぶーちゃんがステーキを食べ終えると、よく熟したメロシに、コーヒー、ケーキが運ばれてきた。

シンベエとぶーちゃんがそれをたிரらげると、三人は満足した表情で部屋に戻った。

その日の夜。こんどは、ぶーちゃんがホーリーとシンベエを誘った。

「食堂車に行こうよ。」

食堂車につくと、シンベエは幕の内弁当、ホーリーはフルコースA、ぶーちゃんはフルコースDを頼んだ。

フルコースAはさきほどのものとメニューが同じだったが、ぶーちゃんが頼んだフルコースDは一味違った。

最初に、スープとガーリックチキンが運ばれて来、それを食べるとスープが三杯、それを食べ終わるとパスタとピッツァ、更にその後はローストチキンとステーキとライス、サラダに生ハムが運ばれてきた。デザートは、完熟メロンにすいか、パイナップル、プリン・ア・ラ・モード、チョコバナナクリームのクレープだった。

ぶーちゃんが、なんとか全てを食べ終えると、少し苦しそうな表情

で言った。

「ううん、おいしかったけれど、お腹いっぱいだよー。」

夜中、ホーリーは、トイレのために起きた。

外の景色を見ると、真っ暗。だが、普通の景色ではない。どうやら、トンネルのようだ。

向かいの電車が、ものすごいスピードで通り過ぎていく。

ホーリーはトイレをすませたあとも、景色を見ていたが、いつまでたってもトンネルを出ない。かなり長いトンネルのようだ。

四十分ほどすると、ようやくトンネルを抜けた。外は、雪景色だ。

「この季節なのに、降雪してるなんて、めずらしいな。」

ホーリーは独り言のように言っていると、ふたたび眠りについた。

朝、起きると、車内放送があわただしく流れていた。

「あと十五分で、終着駅に到着します。降車の準備をしてください。」

「

十五分ほどたつと、終着駅に到着したのに気づいたのか、ぶーちやんとシンベエとホーリーは、荷物をかかえて眠たそうに部屋から出てきた。

「ふあーあ、よく寝た。」

「あつ、昨日、お風呂に入るの忘れちゃった。宿泊先のホテルにいったら、お風呂に入ろつと。」

外へ出ると、三人は外の駅名標にびっくりたまげた。

「えええええ?! 札幌ー?!」

そう、ミステリートレインは、札幌に到着していたのである。

三人は、とたんに笑顔になった。

「ぼくたち、札幌に来れたんだね。札幌に行くのは、長年の夢だったから、うれしいな。あ、だけど、ここへ来るのに一日かかったってことは、帰りも一日かかるのだから、木曜日まで学校を休んじや

うことになってしまふな。まあ、息抜きにはいいか。」

「そうだぜそうだぜ。いまましい学校のことなんか忘れて、札幌で遊びまくろうぜ！」

札幌駅から歩いて十五分、宿泊先のホテルについた。

「うわー、豪華だなあ。」

そのホテルは、ずいぶん豪華だった。電車賃から宿泊代まで全部ただであることを考えると、すごいものだ。三人は十五階にある、同じ部屋の1506号室だった。

ホーリーは、お風呂に入り、シンベエとぶーちゃんはベッドに横たわった。

一時間ほど休憩すると、三人はどこへ観光するか決めることにした。ミステリートレインのチケットは、期間中ならどれだけ電車に乗ってもただというから、素晴らしい。

「旭川に行かない？」

「旭川に行ったら、何も無いと思うよ。」

「稚内はどうか？」

「寒いからおれは嫌だな。」

なかなか行き先を決められないようだ。

「富良野ふらのなんかはよくないかな？」

「富良野？ おお、このどかで気持ちよさそうじゃなか。」

「ぼくも、富良野がいいな。ラベンダーのかおり、好きだし。」

「よし、じゃあ、富良野に決定だね。」

三人は札幌駅に戻り、特急列車に乗って富良野駅まで行った。

富良野についたところで、ぶーちゃんが思い出したように言った。

「そうだ、富良野といえば、オムライスってテレビ番組で見たことがあるよ。オムライス食べない？」

「そうだね。ちょうどお昼時だし、食べてみようか。」

三人は、その辺にあったオムライス屋に入った。オムライス専門店というのも、めずらしい。

三人とも、デミグラスソースのオムライスを頼んだ。オムライスを食べ、富良野を堪能した三人は、特急列車で札幌に戻った。

次の日、朝ごはんはホテルのバイキングだった。

「今日はどこを観光する？観光できるのは、今日で最後だよ。明日は、帰りの電車の時間が早いからね。」

「じゃあ今日は札幌を観光しようか。」

三人は、ふしぎなタイヤの地下鉄に乗り、真駒内駅まごまないへと向かった。

三人は、真駒内駅の近くの温泉に入った。

温泉をたっぷり堪能した三人は、札幌ラーメンを食べたり、新千歳空港で飛行機を見たりして、じつくりと札幌を楽しんだ。

そして、次の日、六月一日。午前十時十分、出発したときと同じ時刻に、帰りのミステリートレインがやってきた。

三人は、疲れていたのか、電車にのるとそのまま寝てしまった。

さらに次の日、六月二日の午前十時に、三人は新端駅へついた。

そして、八王山駅に戻り、それぞれの家に帰った。

三人の親は、学校を休んでミステリートレインに乗り、旅行に行ったことを、まったくしからなかった。

そして、三人は、旅行の思い出を親に語った。

次の日、三人は、ごく普通に学校へ登校した。親が用事と言ってくれたおかげで、先生にもしかられずすんだ。

だが、シンベエが学校を休んで旅行に行ったことをみんなに話してまわり、誰かが先生にそのことを告げ口したせいで、三人は先生にこっぴどくしかられた。

第10話：創作料理選手権?!

六月十三日、家庭科の時間に、家庭科の先生からとんでもないことを知らされた。

「これから六月二十日まで、好きな人どうしで集まって創作料理を作ってもらいます。ただし、一つのグループは三人までです。みんなが、それぞれの創作料理を食べ終えたら、どの料理が一番おいしかったか、投票します。」

「創作料理だって?」

「なんか、おもしろそうだねえ。ぼく、料理大好き。」

「お前は、作るのじゃなくて食べるのだろ。グループは、おれたち三人で決まりだな。」

「ぼくはそれでいいけど、料理は誰が考えるんだい?」

「うーん、それはあとでおいといて・・・」

六月十四日、さっそく創作料理を考える時間があたえられた。

材料は、家から持ってこなければいけないらしいが、今もってきても仕方がないので、考えたグループから材料をもってくることになっていた。

「どんな料理にする?」

「バナナにケチャップをかけて、クレープにしてみようぜ。」

「えー、そんなのまずそうだよ。」

「スパゲッティに、ステーキをのせたら、うまいかもしれないぜ。」

「うーん、単純すぎるなあ、それは。」

「あ、そうだ、クレープって、何入れてもあうよね。クレープに、いろいろいれてみると、面白いかもね。」

「飴玉とか、モチとか入れてみてえなあ。」

「モチはいいかもしれないけれど、飴玉は駄目だと思うよ。歯が欠けちゃうかもしれない。」

「力うどんって、あるよね。力そばや、ラーメンってのはどう？
三人から、次々とアイデアが飛び出す。

「ハンバーガーの中に、カレーライス入れてみるってのは、どうだ？」

「ハンバーグのかわりに、ステーキをはさんだハンバーガーは？」
他のグループからも、アイデアがとびでている。

ホーリーが言った。

「うん、ぼくたちのグループは、『モチクレープ』を作ろう！」

六月十八日、家庭科の時間。五年一組のクラスメイトは、一部のグループをのぞいて、考えた創作料理の材料を持ってきた。

ホーリーはモチ、シンベエは小麦粉と卵、ぶーちゃんはチョコソースやイチゴ、アイスクリームなどを持ってきた。

「ではみなさん、思い思いの料理を作っていきましょう！」

シンベエは、持ってきた小麦粉と卵をボウルに入れかきまぜる。
かきまぜたものを、ぶーちゃんがホットプレートに、うすく広げる。
そして、できた生地にホーリーが色々なものを入れていく。

こうして、モチアイスクリームクレープ、モチイチゴクレープ、モチチョコソースクレープ、モチクリームチョコソースクレープ、モチクリームイチゴクレープが一つずつできあがった。

三人は、それぞれ好みの味のクレープを食べた。

「うん、おいしい。」

「意外とうまいな。」

「これなら、投票で一位をとれるかもねえ。」

三人が創作料理を作り終えたのに気づいたクラスメイトたちが、三人のテーブルへと近づいてきた。

「おお、うまそうじゃん。クレープか。」

「キヤーツ、あたし、クレープ大好きー！」

「でも、これただのクレープじゃないの。創作料理じゃないじゃないか。」

この発言に、シンベエがつっこみを入れる。

「ふふっ、中身が違うのさ、中身が。」

六月二十日、本番がやってきた。この日の家庭科は、なんと四時間。
「みなさん、頑張ってつくってくださいねー。それでは、スタート。」

三人は、おととい作ったのと同じように、クレープをつくる。

だが、今回はたくさんの人数が食べるので、これまたクレープもたくさん作らねばならない。

二時間ほどして、ようやくクレープを作り終えた。

「うん、うまくできたね。」

「へへっ、うまそうだぜ。」

シンベエが、クレープに手をのばす。

「ああ、駄目だよシンベエちゃん。これはみんなが食べるんだから。」

「あ、そうだ。おれな、こっそり一つだけハズレのクレープを入れておいたぜ。」

「ハズレ・・・？」

「誰が当たるか、楽しみだな。」

それから一時間ほどして、全員分の料理ができあがったようだ。

ここで、審査員である生徒たちが、他のテーブルへと食べてまわる。

「ううん、このキャベツでハンバーグをつつんだハンバーガー、おいしいねえ。」

「手羽先ラーメンって、おいしいけれどあまり創作料理って感じがしないな。」

「うおー！このグループ、やりすぎだろー！いくらなんでも、とにかくにチョコソースはないぜ。」

みんなが料理を食べ終わり、投票が開始された。

（一位になりますように、一位になりますように・・・）

（どれが一番人気があったのか、見ものだな。）

（うーん、どれもこれもおいしかった。）

投票が終わり、結果を家庭科の先生が開示した。

「一位、四班のキャベツハンバーガー、二位、五班のモチクレープ、三位、九班のとんかつのカレーソースがけです。これ以下の順位のものは、この表を見てね。」

先生が、表をビラビラとみんなに見せる。

「やったー！二位だぜー！」

「ああ、惜しかったなあ。でも、二位でもいいや。」

「キャベツハンバーガーは、人気があったね。」

とここで、後ろから声がした。

「おい、シンベエの班。お前んとこのクレープ、変なもの入れてただろ。他のはうまかったけど、変なやつだけものすげーまずかったぞ。」

「ああ、納豆コーヒークリームクレープか。サンドなら、おいしいはずなんだけな・・・。」

シンベエが、照れた表情で言う。

「納豆・・・もしかして、それが原因で一位になれなかったんじゃないの？」

「でへへ・・・。」

「ううん、納豆コーヒークリームクレープ、なんかおいしそうだなあ。ぼく、食べてみたいや。」

ぶーちゃんが、笑顔で言った。

第11話：パラレルワールド

今日の四時間目は、音楽。五年一組の生徒たちは、さまざまな楽譜を持って音楽室へ行く。

チャイムがなり、音楽の時間が終わった。

シンベエは、ホーリー、ぶーちゃんと一緒にお喋りしながら音楽室をあとにしようとしたとき、鏡にぶつかってしまった・・・ような気がした。

ぶつかる瞬間、ブラックアウトし、何秒かたつと、鏡と反対の方向を向いていた。

「・・・？」

「何してんの、シンベエちゃん。さっさと戻ろうよ。ね？戻ろう。戻ろうよ。戻ろうね。」

「あ、ああ・・・。」

放課後。

「帰りのあいさつをしましょう。さようなら。」

「さようなら。」

「うーん・・・。どうもおつかしいなあ・・・。」

「何が？何が？何がおかしいの？ねえ、何がおかしいの？」

「あ、うん。音楽の時間、鏡にぶつかった気がするんだけど・・・。」

「

「シンベエくんは、鏡になんかぶつかってないよ。きっと、気のせいだよ。気のせい。気のせいだって。気のせいに決まってるさ。そう。きっと気のせい。絶対、気のせい。気のせいだ。気のせいだよ。」

「

「ホーリー、同じこと何回も言わなくてもわかるぜ。」

「え？何が？何のこと？何のこと？何のこと？何のことなの？」

どうもみんなのようすがおかしい。同じことばを何度もくりかえし

ている。

「シンベエちゃん、ばいばい。さようなら。さようなら。ばいばい。」

「シンベエくん、また明日ね。また明日。また明日。またね。」

「お、おう……。」

「あら、お帰りシンベエ。シンベエ。お帰りシンベエ。お帰り。」
「……。」

母親までどこかおかしい。どうも、あの鏡にぶつかって(?)からおかしなことになっているようだ。

明日、もう一度あの鏡にぶつかってみよう。シンベエは、そう考えながら、自分の部屋へ行った。

次の日、休み時間にこっそり音楽室に入り、鏡のある場所を見てみた。だが、鏡がない。そっくりそのままなくなっているのだ。

シンベエは、念のため鏡のあった場所にぶつかってみた。だが、何もおきない。

シンベエは、深くため息をついた。

その次の日。今日は、音楽がある。音楽室へ行ってみると、鏡があった。

シンベエは、その鏡にぶつかってみた。だが、何もおきなかった。このままではまずい。なんとかしなければ。

音楽の授業が終わってから、もう一度鏡にぶつかってみた。だが、やはり何もおきない。

シンベエは、三回ほどぶつかっているうちにだんだん面倒くさくなってきた、ぶつかるのをやめた。

おかしいことになってから丁度一週間がたった。今日は四時間目に、

音楽の時間がある。

音楽が終わったとき、鏡にぐうぜんぶつかった。だが、痛みを感じない。いつのまにか、鏡の逆方向を向いていた。

「シンベエちゃん。何してるの？早く教室へ戻ろうよ。」

「おお！戻ったぜ！」

それにしても、昨日までのあの異変はなんだったんだろう。シンベエは、謎に思いつながらも喜んで教室へ戻っていった。

第11話：パラレルワールド（後書き）

短いですが、読んでいただきありがとうございました。

第12話..自然体験学習 その1

今治小学校では、七月十三日から七月十五日まで、「自然体験学習」とよばれる五年生との泊まりイベントがある。

実は、六年生にも自然体験学習というものはあるのだが、日にちが違う。六年生は、六月あたりに行くのだ。

自然体験学習の目的は、その名のとおり「自然と触れ合おう」というものだ。

自然が嫌い！というひとや、海や山？ふざけんな！というひとにとっては、ありがためいわくなイベントである。

六月十日、このイベントについてのしおりが配られた。

ここで、内容を読み上げてみる。

「1、行き先 鵜湖^{ひわこ} 2、もってくるもの（数が多いので割愛する）
3、日時 七月十三日～七月十五日 4、服装 ふだんの服 はきなれた靴」

鵜湖とは、電車だと八王山市から一時間半くらいかかる場所にある、日本で一番大きい湖だ。遠足のときよりも、場所は近い。だが、今回はバスにのるので実質二時間半ほどかかるのだ。

当日、五年生の全児童は朝六時ごろに、大きな荷物を二つかかえて今治小学校の体育館へとやってきた。

出発まで一時間ほどの余裕があるので、お喋りの花がさく。

「なあ、鵜湖にいたら、まず何するんだ。」

「えっと、まずは鵜湖博物館を見学だね。お昼まで見学したら、宿へ向かうらしい。」

「ううん、宿のごはん、おいしいかなあ。」

「宿と言っても、普通の宿じゃなくて団体がくる専用の施設なんだよ。『鵜湖青少年センター』っていう。」

「なんか嫌な名前だな。泊まりごころはいいのか？」

「さあね。二段ベッドがあるらしいけど。」

「わあ、二段ベッドがあるんだあ。ぼく、二段ベッドって見たことないから、楽しみだなあ。」

一時間ほどお喋りして、喉がカラカラになったところで、出発のとばが言われる。

「ええ、うんと、こ、こ、この、このたびは、五年生児童全員、自然体験学習へ行つてまいり・・・フツ、いつてまいります。全員、けががないように・・・フツ・・・けがが・・・けがが、けががないように、努力してまいります。」

これは先生ではなく、生徒が言うので、めちやくちやだ。なぜか、笑っている。

このことばが終わったら、生徒たちは大きなリュックを背中に、小さなリュックをお腹に背負って歩きだす。

校長先生が、見送りをしている。とはいっても、校長先生もついてくるのだが。

「いつてきまーす。」

「いつてらっしゃーい。」

大きなリュックをバスの荷台に積み込む。小さなリュックは、バスの中に持ち込むのだ。

バスガイド係の生徒が、バスの前に立って、ゲームなどをする。

「それでは、王様じゃんけんをしましょう。さいしよはぐー・・・」

「だが、とても五年がやるとは思えないような内容なので、ゲームに参加している生徒はごくわずかだ。」

一時間半ほどバスにのると、途中で降りるように言われた。
「これから、博物館の見学に行きます。」

鵜湖博物館のすぐそばに、大きな大きな鵜湖がある。
鵜湖博物館は、結構充実していた。

「うわー、恐竜の標本だ。ぼく、初めてみたよ。」

「ふむふむ、この化石はこうだったのか。」

ホーリーとぶーちゃんは、展示物に夢中だ。

だが、シンベエはこれといって展示物も見ず、図書室でまんがを読んでいた。

図書室にたまたま立ち寄ったホーリーが言った。

「シンベエくん、せっかく博物館にきたんだから、まんがばかり読んでないで、展示物を見たらいいのに。」

「お、おう。」

シンベエは返事だけはりっぱにするものの、一向に動くようすはない。

「もう、ぼくは知らないよ。」

「勝手に言っとけ。」

シンベエは、まんがを読み終わると博物館の裏口から森の道を歩いた。

「虫が多いなー。だけれど、この先には絶対何かあるはず。」

森の道を抜けると、そこには鵜湖の絶景があった。

「うおー、すごいなあ。これ、みんなに知らせてこよう。」

シンベエは博物館の中にいるクラスメイトたちに、このことを伝えてまわった。

「おお、すげえ。」

「よく見つけたな、シンベエ。」

しばらくすると、昼食の時間になった。博物館から出て、近くにあ

った屋根つきの広場で、もってきたお弁当を食べた。

「お母さん、今日はどんかつを入れてくれた。ううん、おいしいなあ。」

昼食を食べ終わると、五年生の生徒たちはバスにのりこみ、鵜湖青少年センターへと向かった。

第12話：自然体験学習 その1（後書き）

続きは順次投稿していきます。

第13話：自然体験学習 その2

「さあ、バスに乗り遅れたひとがいないかどうか、調べる。いないひとは手をあげて。」

「せんせー、シンベエがいませーん。」

「シンベエ・・・？ ああ、高橋のことか。で、その高橋が、いないだっつ。」

中井先生は、バスの窓に目をやった。

「やっつ。あれは高橋ではないか。」

外で、シンベエが手をふっている。

「おーい、お前らおれを置いて勝手に行くなよー。」

「すみません、バスをとめてください。」

バスがとめられ、シンベエはなんとかバスに乗ったものの、中井先生にこっぴどくしかられた。

鵜湖青少年センターにつくと、五年生の生徒たちは砂浜に座らされる。

砂浜という言葉でわかったかもしれないが、鵜湖青少年センターは鵜湖のすぐそばにあるのだ。

鵜湖青少年センターの建物は、えらくぼろくてきたなかった。

「うわー、ぼろっちい。地震とかおきたら、こわれちまうんじゃないか。」

「こら、高橋。そんなこと、いうもんじゃない。」

「へーい、すみません。」

五年生のほとんどの児童は、鵜湖にむかって石を投げている。これが、水切りというものであろうか。中には、ギネス記録なみに石をはねさせていた子もいた。

部屋は、ホーリーが言っていたとおり二段ベッドがあった。しかも、二対ある。

ホーリー、ぶーちゃん、シンベエは同じ部屋だ。シンベエは上の段、ホーリーとぶーちゃんは下の段で寝ることにした。

夜になると、決められた時間に夕食をとらされ、決められた時間に風呂に入れられる。

しかも、風呂では教師たちに「ぬれてないかチェック」と言い訳されて裸をみられてしまうのだ。

寝るとき、それぞれの部屋ではお喋りの花がさく。

とくに、女子はよく喋っているようだ。

男子は、しばらく話した後眠ってしまう。だが、女子は夜中になってもずっと喋り続けている。が、教師にしかられることはなかった。

午前1時くらいになると、やっと全員が眠りにつく。それまで、教師は寝ることができなかった。

次の日、五年生の生徒たちは早朝に起こされた。「朝の集い」という名前のめんどくさいイベントが終わったら、朝食である。

鵜湖青少年センターの食事は、お世辞にもうまいといえないほどまじくかった。さらに、全て冷たいのである。コンソメスープも、ソーセージも。

だが、全て食べなくてはならなかった。食事が大好きなぶーちゃんでも、これは少々きつかったようだ。

「ううん、ぼく、こんなに冷たい食べ物、たべたくないよ。」

「仕方ないさ。学校に少ししかお金を払っていないんだから、これくらいのサービスしかできないんだよ。」

「へっ。冷たくて白いものが浮いているコンソメスープなんか飲めたもんじゃない。」

「ぼく、学校の給食が食べたいな。」

「ここは学校じゃないから、無理だよ。」

「これだったら、刑務所の飯のほうが、うまいんじゃないか。」

「この前パソコンで調べたんだけど、刑務所のご飯は結構おいしいらしいよ。」

「へえ、じゃあ、ぼく刑務所のご飯たべてみたいなあ。」

「逮捕されないと、食えないだろう。」

「試食みたいなことは、できるらしいけどね。」

昼からは、カヌーをこいで鵜湖にういている島まで行くというイベントが行われた。

雨がふってきたのが、中止されなかった。コンディションは最悪だ。カヌーをこいでいる連中からは、もちろん愚痴^{ぐち}がでる。

「ああ、もう。ぬれて最悪だ。」

「ええ、あの島まで行くの。絶対無理だよ。」

四時間もかかり、やっとのことで島についた。日は、既におちはじめている。

島で釣りをして、釣った魚を食べてから、今度はふつうの船で鵜湖青少年センターにもどった。

夕方からは、昨日とほぼ同じスケジュールだった。決められた時間に夕食をたべ、決められた時間に風呂に入るのだ。

今日のお喋りの花は、だいぶ長いことさいていた。夜3時まで、教師たちは眠れなかった。

第14話：自然体験学習 その3

朝おきると、またもやあのまずい朝食を食べさせられた。

今日は、もう何のイベントもない。バスで、今治小学校に戻るだけだ。

それまでの間、生徒たちはセンターの体育館でバスケットボールをするか、湖で遊ぶか、どちらかをするように指示された。本当に、自然を体験する行事なのか気になるところだ。

シンベエは、ぶーちゃんを連れてバスケットボールをしにいった。だが、ホーリーはどちらへも行かずに問題集をやっている。

「えーと・・・正の数は・・・加法と減法・・・微分は・・・積分・・・」

ホーリーは、独り言のように勉強のことを口ずさみながら、問題集をやっている。

このようなお泊まりイベントにも問題集を持っていくところを見ると、勉強好きでさぞかし成績もよさそうだが、ホーリーの成績はかんばんしくない。

帰りのバスの中では、ゲームは行われなかった。約五分の四ほどの生徒は、寝てしまっているからだ。

二時間ほどバスにゆられていると、今治小学校へ到着した。

今回は、「おわりのことば」なることが行われるらしい。

「ええ、われわれ、五年生の生徒、149人は、大きな怪我もなく、帰ってまいり・・・フツ、帰ってまいりました。」

やはり、変な喋り方になっている。

「今日まで自然体験学習でしたが、明日も学校があります。元気に登校するように。それでは、解散！」

なんと、学校は明日もあるようだ。一日くらい、休ませてもらって

もいいのではないだろうか。

五年の生徒たちは、家に帰ると親に自然体験学習であったことなどを話した。

「へえ、お前バスに乗り遅れたのかい。それで、どうしたんだい？」

「いや、乗せてもらったんだよ。バスをとめてくれて。」

「まあ、あんた他のひとに迷惑かけすぎでしょ。」

「てへへ。ごめんなさい。でも、勝手に出ていくバスもわるいんだぜ。」

その日の夜、寝る時間に、シンベエは目をつむりながらこんなことを考えていた。

「なんだかんだいって、みんなと泊まるのは楽しかったなあ。また、行ってみたいぜ。」

カヌーのときや、食事のとき、あんなに文句を垂れ流していたにも関わらず、家に帰るとそんなこともすっかり忘れてしまったようである。

第14話：自然体験学習 その3（後書き）

こんな話こそが、真の「生活をえがいた物語」かもしれないですね。

第15話：謎の隕石

八王山市のひとたちがもう寝静まっているころ、ものすごい音とともに地面が揺れた。

これで、ほとんどのひとが起きた。

「地震か？」

「地震にしてはえらく短くないか？」

「なにやらすごい音がしたぞ。」

次の日、今治小学校に一番のりしたシンベエが、ものすごい声を出した。

「なんじゃこりゃー！」

この声を聞いた他の生徒たちが、よってくる。

「うわ。すげえ穴あいてんじゃん。」

「誰かが作った落とし穴かな。」

「学校がぼろいから、昨日の地震でこわれたんじゃないの。」

「地震なんておきたっけ？」

「おきたじゃん。昨日の夜。」

「あれは、地震じゃないと思うよ。一瞬だけしか揺れなかったし。」

「こらこら。何をしておるのかね。」

校長先生が、生徒たちをよけた。

「ん？なんだこの穴は！誰がやったんだ！」

校長先生がものすごい形相で、まわりの生徒たちを睨みつける。

「あ、校長先生。ちがいます、ぼくたちがやったんじゃないです。嘘をつくんじゃない！誰がやったんだ！」

「いや、本当です。朝、学校に来てみると、穴があいていたんです。」

「そんなこと、あるわけないだろう！」

「いや、だからぼくたちもふしぎだなあと思っているんです。」

「とにかく、管理職員さんにみてもらおうから。どきなさい！」

校長先生は、かなり不機嫌なようだ。

シンベエは、穴の下をのぞいてみた。

のぞいた瞬間、目を光が貫く。

「まぶしいー！なんだこれー?!」

シンベエは、もう一度のぞいてみるが、まぶしくて、やはり見れない。

ここで、管理職員さんがやってきた。管理職員さんは、穴をのぞこうとする。

「いたっ。なんだこれは？」

管理職員さんも、やはり中が見えないようだ。管理職員さんは、穴から床をひっぺがした。

「うわー。」

「何だこれ？」

床がひっぺがえされると、まわりにいる生徒たちの歓声があがる。

中には、金色の石のようなものが入っていた。

石は、キラキラとかがやいている。

管理職員さんは、石をとろうとした。だが、持った瞬間に落としてしまった。

落ちた石は、粉々にくだけた。

「あっ、穴があいてる。」

「うん、さっきからあいてるよ。」

「違う違う、天井にだよ。」

管理職員さんと生徒たちは、ほぼ同時に天井を見上げた。

「空が見えるよ。」

「じゃあ、この石が上からふってきたってこと？」

「隕石？」

生徒たちの歓声があがった。

管理職員さんは、だまって隕石のかけらをちりとりのにのせると、その辺にあったゴミ箱に捨ててしまった。そして、ひっぺがした床を

修理した。

そのあとから、隕石を見たひとたちがおかしくなっていた。

「ねえ、昨日隕石みたんでしょ？」

「わたしはねこだよ。」

「何いってるの？それより、どんな隕石か教えてよ。」

「あなたはガムテープ！」

どちらが隕石を見たひとなのかは言わずともわかっていると思うが、このように隕石を見たひとは、言っていることがとんちんかんなのだ。

「シンベエちゃん、隕石、見たんでしょ。そのあと、どうなったの。」

「だってぼくは八百屋だよ。」

シンベエのくせに、「ぼく」といいう一人称を使っているところから、ただごとじゃないとわかる。

「もう、何を言ってるんだよ、シンベエちゃん。」

「本。本本本。」

隕石には、見た者をおかしくする力があつたのだろうか。

三人が休み時間に廊下に出ると、シンベエがゴミ箱にひきつけられるかのようにゴミ箱を見た。

その瞬間、シンベエが言った。

「あれ？おれ何してたんだっけ？」

「何いってるんだよ、シンベエちゃん。今日の朝から、なんかおかしいよ。遊びにいこうよ。」

「お、おう・・・。」

シンベエとそのほかの生徒たちは、こうしておかしな言動をしなくなったが、一部の生徒はずっとおかしいままであった。おかしいままの生徒は、ゴミ箱にひきよせられもしなかったのだ。

あの隕石は、何だったのだろうか。そして、ゴミ箱にひきつけられたひととそうでないひとがいたのは、なぜなのだろうか。

おかしなままの生徒は、念のため精神病院へ行かされた。精神科医に診せると、精神病と同じような状態になっていたというのだ。

おかしいひとたちは、精神科医にもらった薬をのんだおかげで、おかしくなくなった。だが、あの隕石に関しては、いつまでたっても謎のままであった。

第16話：三人組、小説を書く

今日の今治小学校五年一組の時間割には、「三時間目は国語」と書かれている。

国語の授業が始まると、中井先生はまずこう言った。

「みなさんに小説を書いてもらいます。」

「ええー？」

教室内は騒然となった。生徒は、今の今まで小説など書いたことがないのだ。中には、小説を読んだことさえない者もいる。

「少なくとも、400字詰原稿用紙5枚分くらいは書いてください。」

「なんだ、ショートショートでもいいのか。」

ホーリーが言った。

「その、ショートなんとかっていうのは何なんだ？」

「短い小説のことだよ。名前の由来は、短編より短いという意味で・・・。」

「わかったわかった。詳しいことは知らないよ。なるほど、短い小説という意味か。それでも、400字詰の原稿用紙5枚って長くないか？」

「そんなもんだよ。本で小説を読むと、たかが1ページや2ページで終わってしまう物語でも、原稿用紙にすると3、4枚くらいになったりするよ。」

「へえ、おれ、小説読んだことないから、よくわかんないけど、要するに3ページくらい書けば大丈夫ってことだな。」

「そういうことだね。さて、ぼくはどんな小説にしようかな。ショートショートじゃなくて、長編を書きたいんだけど・・・手書きじゃ、さすがにきついかな。」

「では、原稿用紙をとってください。」

中井先生はそういうと、たくさんの原稿用紙がついている本のようなものを二つ、教卓の上にどさっと置いた。

生徒たちは、原稿用紙をとってさっそく小説を書き始めた。

三人組は、ホーリーだけ書き始めていたが、ぶーちゃんとシンベエはまだ書き始めていなかった。

「ううん、どんなお話にすればいいんだろう。」

「読んだこともないおれに、書けつつたって無理な話だよ。」

「こらこら、だまって書きなさい。」

「だから、書けないってば。」

シンベエが、小さな声で言った。

この国語の時間が終わったとき、ホーリーは原稿用紙3枚分くらい書き終えていたが、結局ぶーちゃんとシンベエは全く書けなかった。

次の日の国語の時間、またしても「小説を書く」授業であった。

授業が始まって10分ほどすると、ぶーちゃんは思い出したかのようにスラスラ書き出した。どうやらネタを思いついたらしい。

だが、シンベエはやはり書けないでいた。

授業が終わると、ぶーちゃんとホーリーは書いた小説を見せ合いっこしていた。

「シンベエちゃんは、どれくらい書けたの？」

「ふんっ。おれは、1枚も書いてないさ。」

「シンベエくん、もう小説を書くことができる時間は少ないんだから、早く考えたほうがいいよ。連絡帳に、自主宿題として、『小説のネタを考えてくる』とでも書いておけば？」

「めんどろくせえよ。いちいちそこまでして書きたくもねえ。」

「ホーリーちゃん、何枚くらい書いた？」

「そうだな、ぼくは、5枚くらい書いたよ。」

「へえ、すごい。ぼくは、まだ2枚だけ。」

ぶーちゃんが、照れた表情で言う。

「はいはい、すごいですね。ではわたくしは遊んできますんで。」
ふてくされたのか、シンベエは少し怒ったような口調で教室を飛び出した。

一週間たつと、書いた小説をみんなの前で読み上げるといふ授業が行われた。

生徒たちは、名前の順番で小説を読んでいく。

シンベエは、1枚だけ小説が書けたようだ。

三人を名前の順番で並べると、シンベエ、ぶーちゃん、ホーリーになるから、シンベエはあとの二人より早く小説を読み上げることになった。

シンベエの番が来た。シンベエは、緊張した表情で教室の前に立つ。

「ええ、次は、ぼくの小説です。あるところに、おじいさんとおばあさんが居ました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは、川へ洗濯に行きました。おじいさんは、山で、変なおじぞうさんを見つけました。変な理由は、おじぞうさんの顔が、真っ赤なのです。」

「シンベエ、いいぞー。」

「シンベエ、頑張れ。」

みんなから応援のメッセージが送られるなか、ホーリーは、一人シンベエの小説につっこんでいた。

（最後の文、おかしいね。主語と述語がリンクしていない。）

「へへ、ありがとう。おじいさんは、おじぞうさんを家に持ってかえることにしました。」

おばあさんは、そのおじぞうさんを見ると、びっくりしていました。その日の夜、おじいさんとおばあさんが眠っているとちゅう、嵐が起きました。だけれど、おじぞうさんが家をバリアで守ってくれたので、おじいさんとおばあさんは助かりましたとき。おしまい！」

「シンベエ、よかったぞ。」

「面白かったー。」

なるほど、とてもいい話とは思えないが、小説を読んだこともない連中たちにとっては、これで面白いらしい。

そして、二時間かけて、全員の小説の発表が終わった。ホーリーのお話は未来の世の中のお話、ぶーちゃんのお話は食べ物のお話だった。

「ぶーちゃん、お前食べ物にこだわりすぎだろ。」

「へへ。」

ぶーちゃんの顔が赤くなった。

「シンベエちゃん、あの話、面白かったよ。」

「少々誤字はあったけれど、なかなかいいと思うな。」

ぶーちゃんは、本当の気持ちを言ったのだろうけれど、ホーリーのことばはおそらくお世辞であろう。

「ありがとう。よっしゃー、おれ、小説家になるぜ。」

少しほめられただけで、喜ぶのがシンベエの特徴のようである。

第17話：ピアノコンサート

「ええっ？ お前が、ピアノを？」

「母さんが、もっと音楽に慣れ親しんだほうがいいって言うから・・。」

「へえ、ぶーちゃんにしては、すごいな。」

「そうだねえ。音楽は、最高の娯楽だしねえ。」

「うん。それで、来月の上旬に、さっそくピアノコンサートがあるんだ。たくさんひとが集まった前で、ピアノを弾くんだよ。」

今は七月二十六日であるから、来月の上旬といえbaumうすぐである。「そりゃすごいな。自分の演奏を、見てもらえるのか。」

「うん。それも、ちゃんとしたコンサート会場だよ。もちろん、自分一人だけじゃないけどね。だけど、練習が、難しいんだ。ピアノコンサートで、ぼくは、『クラウ』っていう作曲家のひとの『ソナチネ1番』っていう曲の、『1楽章』っていう部分を弾くことになっていて、その曲を習っているんだけど、るんだけど、どうしても弾けない部分があつて。」

「『ソナチネ』ってことは、結構レベルが高いじゃないか。ぶーちゃん、意外とやるんだねえ。」

ホーリーは、こんなことまで知っているようだ。まさに、雑学王である。もつとも、音楽に関しての知識は、雑学とはいえないが。

「まだ、日にちは決まっていけないけれど、八月になったら、決まらしいんだ。ぼくのピアノコンサート、ぜったい、来てね。」

「おう、わかったぜ。」

「行くよ。行く。ぶーちゃんの演奏が、どんなものか見てみたいしね。」

この日の夕方、ぶーちゃんはピアノ教室へ行き、約一時間ほど曲の練習をした。

同じ曲の同じところを何度も弾いたりするので、ぶーちゃん自身は弾き飽きていると同時に、聞き飽きている。

この日は熱が少しあったようで、ピアノを弾き終わった頃には体中汗でびしょびしょであった。

「あら反吉、あなた汗だくじゃないの。ピアノの練習頑張ったんだねえ。」

「うん。」

次の日も、その次の日も、ぶーちゃんは、ピアノの練習をした。

そして、ピアノコンサートの前の日には、風邪で寝込んでしまった。

「せっかく頑張って練習したのにねえ・・・明日、できる？」

「うん・・・頑張るよ・・・」

「反吉。よく寝たら、熱なんてすぐに吹っ飛ぶよ。もう寝たら？」

姉さんのアドバイスで、ぶーちゃんは「うん。」とだけ言って寝室へととぼとぼ歩き出した。

「あら、反吉。ふらふらじゃないの。姉さんがささえてあげる。」

「ありがとう・・・」

ピアノコンサート当日。ぶーちゃんの熱は、もののみごとに下がっていた。

コンサート会場につくと、ぶーちゃんは小学六年生の部でおおとりを飾ることになった。

「ええ。ぼく、最後なの。」

こう言いながら客席のほうを向くと、そこにはホーリーとシンベエの姿があった。

「あ、シンベエちゃん。ホーリーちゃん。もう、来てたんだねえ。」
ぶーちゃんは独り言のようにつぶやいていた。

「ナンバー13番、小学六年生の部最後を飾るのは、中田反吉くんです！」

ぶーちゃんが、顔を赤らめながらピアノに近づき、客席に向かって礼をする。

「おお！ぶーちゃんだ！」

「練習の成果を、発揮できるといいけどね。」

ぶーちゃんが、ピアノのいすに座り、曲を弾き始めた。

曲を弾き終わると、客席から拍手がおこる。

コンサートが終わった後・・・

「ねえ、ぼく、ちゃんと弾けてた。弾いているひと自身は、よくわかんないんだ。」

「弾けてたよ。ミスもほとんどなかったし。」

「ほんとー？うれしいなあ。ぼく、来年もピアノコンサートやる。」

「ううん、たくさんひとから拍手されるのはなかなかのもんだなあ。おれも、ピアノやってみようかな。」

楽器に全く関心がなかったはずのシンベエが、めずらしくこんなことを言うもんだから、ホーリーとぶーちゃんはびっくりたまげた。

第18話：マラソン大会

「来週の月曜日、マラソン大会がある。これに備えて、よく走りこんでおくように。」

七月中旬、この暑いときにマラソン大会をやらなければいけないらしい。

しかも、学校でやるのではなく、陸上競技場でやるというのだ。たかがマラソンごときに、そこまでする必要はあるのだろうか。

帰宅途中、シンベエ、ぶーちゃん、ホーリーのおなじみ三人組は、こんな話をしていた。

「マラソン大会かあ。おれ、マラソンは大の得意だぜ。絶対、一位とってやるぞ。」

「マラソンなんかやるより、ふつうの授業をしたほうがよっぽど時間を有効に活用できるよ。わざわざ、陸上競技場でやりたくないよ。」

「ううん、ぼく、走るの苦手だから、嫌だなあ。」

「なんだよお前ら。陸上競技場でやるなんて最高だし、走るの苦手でもマラソンは楽しいじゃん。」

「どうやら、シンベエには他人の気持ちがわからないようだ。」

「それなら、シンベエくんは、勉強をやることを楽しいと思っているのかい。」

「勉強と、マラソン、関係ないだろ。」

「でも、ぼくらにとっては、シンベエくんが『勉強楽しいだろ。』と言われているのと同じようなものなんだよ。」

「ぼくは、勉強も嫌い・・・。」

「やれやれ、勉強もスポーツも無理なぶーちゃんは、お先真っ暗だなあ。」

シンベエのことばで、ぶーちゃんの堪忍袋の尾が切れた。

「シンベエちゃん。ぼくは、勉強もスポーツも嫌いだけれど、頑張っているんだよ。頑張ることと好き嫌いは、関係ないんだよ。」
やさしいように見えるが、ぶーちゃんにとってはこれで本気で怒れているつもりなのだ。

「へん。あんなにへたくそなのに、頑張っているわけがないだろ。」

「ぼく、シンベエちゃんのことなんか、だいきらい！」

ぶーちゃんはそう言うと、走って先に帰ってしまった。

またもや、シンベエはぶーちゃんに嫌われたようである。

「シンベエくん。いくらなんでも、言いすぎだよ。」

「へんっ。そんな関係ないやい。」

この日、五年一組のクラスメイトのうち、マラソンの練習をしたのは一人しかいなかった。

その一人とは、もう既にわかっているかもしれないが、シンベエだ。もっとも、シンベエは練習というより趣味で走っているようなものだが。

次の日の朝、ぶーちゃんは昨日のことが嘘のように、シンベエに話しかけた。

忘れっぽい性格なのだろう。

「シンベエちゃん、マラソンの練習、した？」

「しただ。」

シンベエも、さほど気にしていないようだ。

「ぼくは、してないよ。ホーリーちゃんもだよ。」

「あ、そう。でも、練習の成果は当日にはっきりと出るよな。」

「練習しても、できない子だっているんだよ、シンベエちゃん。」

「ははーん、それで、お前は練習してなかったのか。」

「違うよ。恥ずかしかったから・・・。」

「へんっ、恥ずかしいだけで練習しないなんてもったいないぞ。今日、家に帰ったら、すぐさまおれの家に来てくれ。一緒に練習しよ

うぜ。」

「ええ。ぼく、いやだよ。」

「いいからいいから。練習すれば、きっと順位はよくなるって。」
「う、うん。」

その日、シンベエの家にぶーちゃんが来ることはなかった。

翌日・・・

「おいぶーちゃん、お前、昨日来なかっただろう。」

「だって、用事があったもん・・・。」

「だってさってもあるか。なんで来なかったんだよ。」

「だから、用事が・・・。」

「用事って、なんだよ。嘘ぬかしてんじゃないのか。」

「ち、違うよ・・・。ピアノ教室があって・・・。」

「なんだ、ぶーちゃんまだピアノ教室に通ってたのか。じゃあ、ピアノ教室が終わってから来ればよかったじゃないか。」

「ピアノを弾くのって、結構疲れるんだよ。そんなの、無理だよ。」

「はあ・・・お前は、『無理、無理』とばかり言うんだから。何事もやってみなければわからないぜ。いわば、食わず嫌いのようなものだ。」

「だって、ピアノが終わったあと本当に疲れていたんだもん。マラソンの練習なんて、できっこないよ。」

「しかたねーな・・・。今日は、来いよ。」

「ええ、もしかして、毎日やるの。」

「そうだけ。」

「だけど、今日はピアノがあるから、できないよ。」

「なんでピアノが二日連続あるんだよ！嘘つくな！」

「ほんとだもん。ぼくの通っているピアノ教室、毎日あるんだもん。」

「へっ、ピアノには毎日通えて、マラソンは無理なのかよ。」

「だって、ピアノは楽しいけれど、マラソンはつまないんだもん・・。」

「ってことは、結局一日も練習できないっていうのか。困ったものだな。」

「そんなことで、困らないですよ。ぼく、マラソンなんてどうでもいいよ!」

「本当に困ったもんだな。」

「もう、ぼく知らない!」

ぶーちゃんは、よほどのスポーツ嫌いなようだ。

この日の夜、もうとっくに日が落ちているころ、シンベエの家にぶーちゃんがやってきた。

「おお、ぶーちゃん。練習しにきたのか?」

「うん・・・。」

「とうとう、お前もやる気が出たんだな。」

「ねえ、今治公園で走ろうよ。」

「あそこは、狭いから駄目だ。普通の道路で走ろうぜ。」

「ええ、でも、危ないよ。車が来るし・・。」

「端っこを走れば問題ないさ。」

「うん。じゃあ、早く行こうよ。」

ぶーちゃんは、かなりのろまだ。シンベエが全力疾走で走れば、1秒で1メートルほど差がつくくらいだが、シンベエはぶーちゃんにあわせて走っている。

9キロくらい走ったところで、ぶーちゃんが口を開いた。

「ハアハア・・。もう、無理だよ。走れないよ・・。ハアハア・・。」

「じゃあ、そろそろ終わりにすつか。」

二人は、ゆっくり歩きながら家へ帰った。

週明け、マラソン大会がおこなわれる日がきた。

五年生の生徒は、電車に乗り、陸上競技場へと向かう。

陸上競技場につくと、さっそくマラソンが始められた。

五年生の全生徒は149人であるから、人数はかなりのものになる。スタートのとき、一番前の生徒と一番後ろの生徒では約3メートルほどの差があった。

これでは、公平にマラソンができない。だが、先生たちはあくまでも「スポーツに親しむ」ためにやっているようなので、関係ないこと・・・であるとされている。

よい、スタート。モデルガンの音が高らかになると、五年生の全児童はいっせいに走り出す。

だが、あまりにも人数が多いためか、さっそく転ぶものもでてきた。ぶーちゃんは、遅いが確実に、前へとつめていく。

マラソンが終わると、順位発表がなされた。

1位は、なんとシンベエであった。よほど、走るのが得意なようだ。2位から5位までは他のクラスだったが、6位以下の上位はほとんど一組がかざっていた。

ぶーちゃんは、39位とかなりの好成績を残した。

ホーリーは、148位で後ろから2番目と、かなり悪かった。

1位になったシンベエには、表彰状が送られた。

三人は、帰宅途中、こんな会話をしていた。

「ぼく、かなりいい順位で、うれしかったよ。シンベエちゃん、1位だなんて、すごいねえ。」

ぶーちゃんが、シンベエの持っている表彰状をまじまじとながめる。

「ぼくは、順位なんてどうでもいいから適当に走ったよ。」

「へん。努力したものが、いい成績を残せるんだよ。わかってないなあ、ホーリーは。おれなんて、1位だぜ、1位。」

「だから、ぼくははなから順位なんてどうでもいいんだよ。」

「まっ、他人のことなんて、おれには関係ないけどな。」

「シンベエちゃん、もしかして、運動会でも1位をとれるんじゃないの。」

ぶーちゃんが、いきなり話題をかえた。

「はは、そうかもなあ。」

シンベエは高らかに笑った。

第19話：夏休み突入

ここ今治小学校は、夏休みに入るのが他の小学校より少々早い。他の小学校なら、七月二十七日とか、七月二十五日とかが多いが、今治小学校ではなんと七月十九日から夏休みなのだ。今は七月十五日だから、もう少しで夏休みが始まる。

「しあさってから夏休みですので、夏休みの宿題を配ります。」
中井先生はそういうと、紐と一枚のプリントを生徒たちに配った。プリントをどんどん重ねていき、最後にひもで本のようにするのだ。まず最初は、夏休み絵画コンクールのプリント。だが、このようなイベントに参加するものは、毎年二人くらいしかない。お次は、歯磨きカレンダー。歯磨きをちゃんとやったかどうか、プリントに書き込むのだ。

六年生にもなって、歯磨きをしないやつなんていないだろうと思うかもしれないが、このクラスでは歯磨きをしない生徒が多い。歯磨きカレンダーがくばられたとき、ドキッとした生徒が何人かいた。

その後、宿題のプリントややらなければいけないことが書いてあるプリントが配られ、生徒たちの持っている宿題プリントはかなり分厚くなった。

そして、最後に「夏休みの宿題」と大きくかかれたプリントを上に乗せて、紐で縛るのだ。

「表紙の絵に色をぬりなさい。」

まったくもって意味がないことだと思うが、表紙に書いてある絵をかかなければならなかった。

一部の生徒をのぞいて、適当に色をぬっている生徒もいた。

もちろんシンベエは、その中のひとりであった。

人の顔を青にぬったり、服は全部黒だったり、もうめちゃくちゃ

だ。

全員が色をぬりおえると、1学期に書いた図工の絵や、工作などがくばられた。

生徒たちはてさげにそれをつっこむ。

それが終わると、国語の授業が開始された。

下校途中、三人は夏休みの予定について話していた。

「なあ、おまえら、夏休みの予定、なんかあるか。おれは、とくにないけど。」

「ぼくもないね。」

「ぼくは、家族で旅行にでかけるよ。」

「へえ、お前は旅行に行くのか。どこに行くんだ？」

「京都だよ。ついでに、大阪と奈良も行くけどね。」

「うらやましいぜ。」

ぶーちゃんの家庭はそこまで裕福ではないが、旅行くらいなら行くことができるかもしれないようだ。

それから三日後、終業式が行われた。

校長先生が、体育館の舞台で話をしている。

これが終わると、先生たちのヒーローショーが行われる。

悪者役が学校で「長い休み中にこんなこととしてはいけません」といわれていることをする。

そこで、ヒーロー役が「そんなことしちゃだめだよ。これは、こうこうしないと。」みたいなことを言っておわる。

高学年にはつまらない劇だが、一年や二年のチビどもはこれでも喜んでいようだ。

終業式が終わると、通知表を教室で渡され、それでもう下校となる。

家に帰った生徒たちは、なるべく早く宿題を減らそうと、さっそく宿題をやっている。

セミがなきはじめた。もうすっかり夏である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1300g/>

愉快的三人組

2010年10月10日15時31分発行